

Gno G-let

グノレット

vol.16

2015年12月発行

2015年夏。Gnobleの化学 いよいよ開講!

火をおこす。物質が反応する。

『実物』を見て理解を深める、グノーブルの化学

グノーブル対談 物理

時にはノーベル賞論文の実験をも検証しながら、
生徒との対話を通じて「なぜ」を解き明かす授業を展開

Teacher's Voice 数学

1つの道具で、類似性のある10のミッションをクリア
「論述する力」を、確実に身につける

保護者座談会 2015

大学受験に役立つ力はもちろんのこと、
人間形成の上で大事なもので授けていただきました。

グノーブルOB・OGインタビュー

グノの授業は、先生と生徒のどちらもリーダー。
信頼関係が基調となった双方向授業でした。

東京大学法学部卒業(開成出身) 榎野 平さん

一橋大学法学部卒業(学芸大附属出身) 津川 菜央さん

中学受験グノーブル 国語講師座談会

一貫性のある「授業×教材×テスト」で
生徒たちに「気づき」の喜びを与える!

学校探訪 Focus on School

渋谷教育学園幕張中学・高等学校

英会話グノキッズから

子供が自主的に英語の勉強ができるようになる
秘密とは?

**Don't judge each day by the harvest you reap
but by the seeds that you plant.**

毎日をその日の収穫高で判断せずに、
まいた種で判断しなさい。



ロバート・ルイス・スティーヴンソン

Robert Louis Stevenson (1850年11月13日～1894年12月3日)

イギリスのスコットランド、エディンバラ生まれの小説家、詩人。

代表作には、少年冒険小説の傑作「宝島」(1883年)、善と悪の両極端に
苦む二重人格者を描いた「ジキル博士とハイド氏」(1886年)がある。



Gnoble GROUP

2015年夏。Gnobleの化学 いよいよ開講！

火をおこす。物質が反応する。
『実物』を見て理解を深める、
グノーブルの化学

この夏、高校2年生を対象としたグノーブルの化学がいよいよ開講しました。今年で四期目となる物理に続く理科の科目となります。授業の特徴は、身近な化学現象を、実験や写真、映像といった実物に触れながら理解を深めてゆくというもの。学校では理科の授業において実験にかける時間数が減少しているなか、どのような授業が展開され、生徒たちはどのような反応を示すのか。さっそく、化学担当・伊藤有仁先生の授業を参観させていただきました。（取材：吉村高廣）

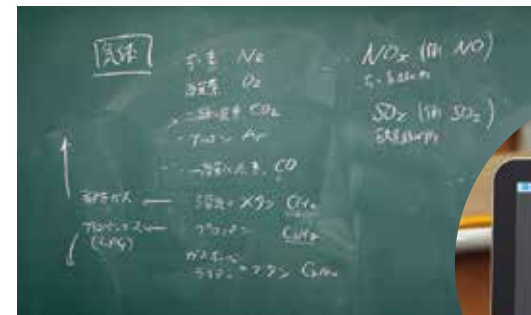


化学担当
伊藤 有仁

教室がまるで理科の実験室に！

参観させていただいたのは、夏期講習2日目(全4日間授業)。教室に入ってまず驚いたのが、黒板の前にさまざまな実験器具が並び、まるで理科の実験室といった様相であったこと。その前で伊藤先生が念入りに器具の調整をされていました。入室してきた男子生徒も「おっ!」と驚き興味津々。器具のセッティング終了後、いよいよ授業のスタートです。

この日の授業は化学基礎の第一歩「物質と粒子」の総復習から。気になる実験器具には触れることなく前日の授業の理解度確認が行われます。授業は「身近にあるもの」をテーマとして質問形式で進みます。建築物や船舶にはなぜ鉄が用いられているのか、タンパク質と食塩の混合物から食塩だけを取り出す方法とは、夜の噴水にレーザー光を当てるとなぜ光の道筋が見えるのか、など。設問自体がユニークであったため、参観しながら思わず真剣にその理由を考えてしまうこともしばしば。生徒たちがすらすらと回答していることから、前日学んだ内容の理解の深さを感じる



空気中で窒素と酸素は簡単に化合しないのはなぜか。その理由を気体の種類と特性から解き明かしていく。

ことができました。

食品用ラップで炎色反応を見る

授業2日目のメインテーマである「身のまわりの物質」にテキストが進むと、いよいよこの日の最初の実験「炎色反応の観察」が行われました。そこでまず先生が取り出したのは、私たちが普段使っている食品用ラップ。「これは誰でも知っている食品用ラップです。でもラップの開発は、そもそも食品保存のためではなく戦争のために開発されたことを知っていましたか」と問いかけます。食品用ラップと戦争？

伊藤先生の解説はこうです。第二次世界大戦中に、ジャングルを歩く兵士の靴の中敷(水虫防止)として、またあるときは銃や弾薬を湿気から守るための包装フィルムとして使われていたのだと言います。生徒たちは初めて聞く身近な物の歴史に一様に驚きを隠せません。

こうした歴史的背景を語った上で授業の眼目、炎色反応の実験を開始します。用意された食品用ラップはポリ塩化ビニリデン製とポリエチレン製の2つ。まず、アルコールランプで熱した銅線にポリ塩化ビニリデン製ラップをわずかに付けてふたたび炎の中で熱し始めると、生徒たちは身を乗り出して事の成り行きを見守ります。するとやがて、青緑色の炎が……。炎色反応が現出された瞬間です。

次いで、ポリエチレン製のラップを銅線に付けて火にかざします。ところがいつまで経っても炎色反応は起こりません。つまり、このとき生徒たちは、銅という物質は塩素と交わることで炎色反応を起こすことを「実物」を見て学んだわけです。

化学発展の歴史に沿って理解する

授業の終盤には、この日最後の実験「孔雀石の精錬」が行われました。光沢のある緑色の縞模様をした女性のネックレスがモニターに映し出され、鉱物標本やビーズ状のサンプルが生徒の座席に回覧されます。エリザベス・テラー

扮する映画「クレオパトラ」を映し、古代エジプト人のアイシャドウが孔雀石の粉であったことなどを紹介している間、

先生は先ほどのビーズを数片、木炭と共につぼに入れて強熱していきます。モニターには、ノア方舟が流れ着いたといわれるアララト山が映され、その山体は孔雀石で覆われており、岩床のうえの燃やした焚き火か山火事後の灰の下から、「金属還元法」による銅のかたまりを拾い出したのだと解説。生徒たちは思い思いに、古代人が偶然にその現場に遭遇し、冶金を見出した光景を想像したことでしょう。

つぼのふたが開けられると、中から孔雀石のビーズが取り出され、その表面はあかがね色に変化しています。テスターの先に触れると「ピー」と音が鳴り、電気が通ることを確認。周りに集まった生徒たちから歓声が上がりました。

そのあと授業は、先史時代の青銅器文明から、トロイの木馬、「鼎の軽重を問う」の意味、方広寺の釣鐘と歴史を追いかけていき、弥生時代の銅鐸や銅鏡の考古学的な考証に、青銅のなかにわずかに混入している鉛の同位体が使われているという話につながっていききました。

「化学という学問がどのような流れで作り出されてきたかを理解することが、化学の全貌をとらえるひとつの近道である」という先生の考え方を垣間見ることができました。

化学では実体験に勝る学びはない

炎色反応は、金属イオンの種類によって炎の色が変わる現象で、中学や高校のころにイオンの種類と色の違いを覚えさせられた記憶があります。しかしそれは、テスト用に丸暗記しただけのこと。銅の炎色反応が青緑の色であることなどすっかり忘れていました。授業の参観後、伊藤先生は実験を通して「実物を見る」ことの意義について次のように話されました。

「小学校の理科の授業では、アルコールランプの使用が禁止され、昔のように実験を行うことは少なくなりました。カエルの解剖も敬遠されているでしょう。ただ、当時は、気持ち悪い! など言いながらも、実物に触れた時の感触は何十年経っても覚えているものです。そこが実物に触れる体験の強さであり、化学の本質を理解する決め手です。

また近頃は、硫酸の化学式も書ける、熱化学方程式やイオンやpHの計算も完璧で東大に合格したけれど、実物の硫酸を見たことがない人が多くいます。それが悪いというのではなく、毒物などの危険なものは別としても、少なくとも私の授業では、自分が学んでいるものはできるだけ見せてあげたいと思っています」

Interview

いまここで、 いったい何が起きているのだろう。 化学現象の追究は、 皆さんの人生にも役立ちます。

化学担当 伊藤 有仁

実物を見て、感じて、知識と一致する

今回の夏期講習を終えて感じたことは、比較的深いところまで化学を学んできている生徒と、「初めて知った」という生徒がいて、持っている知識に若干差があるように感じられました。そうした中で、食品用ラップと銅線を使って炎色反応を再現してみせましたが、その原理を知らない人でも食品用ラップを知らない人はいません。そうした身近なものを使って学んでいけば、化学を学ぶ敷居が低くなりますし、すでに原理を理解している人でも、未知なる体験を通して更なる興味が持てるはずです。

いきなり、「銅はバイルシュタイン反応を起こして……」といった解説をはじめて、方程式を黒板に書き出しても、きっと眠くなるばかりで頭に入らないでしょう。ところがこれまで、化学の授業はそうした進め方をするのが当たり前と思われがちでした。そうではなく、実際の「物」を見せて、「何が起きているかは分からないけれど、確かに何かが起きている」と、漠然とした疑問を持ち、自分の頭で考える。それを学びの土台として、覚えるべき化学の基本を伝えていくことが肝心です。

実物を通して学ぶ意味は、見ている物、感じている事、そして頭の中で理解している知識がぴったり一致してくるところにあるのです。

興味の赴くままに授業の行方も変わる

私自身にも発見がありました。コロイド粒子にレーザー光を当てると光の筋が見えます。それを「チンダル現象」と呼びますが、その解説をしたところでひとりの生徒から鋭い指摘を受けたのです。

噴水の水滴ならチンダル現象が見える。しかし、空気にも

も多くの粒子があるのになぜチンダル現象が見えないのか。これを簡単に答えてしまえば、「空気の粒子はすごく小さいため、光は散乱するが観測できない」ということになります。

実際にそう解説をしたところ、今度は「粒子が小さいのなら、散乱ではなく他の広がり方をするのではないか」という指摘がきました。おそらくその生徒は、小さな粒子だと散乱の仕方が違うことを何かで見聞きして知っていたのでしょう。そこでその回の授業は、噴水で起こる「ミー散乱」と、空気で起こる「レイリー散乱」という大学の物理でやるようなところまで踏み込んで授業をしました。空の雲が白いのは水滴や氷の粒によるミー散乱が起きているから、空が青いのは空気の分子によるレイリー散乱が起きているから、というわけです。

もちろん、いたずらに大学レベルの授業を行う必要はありません。たとえば電気分解であれば、公式や反応式を教科書に書いてある通りに覚えることも大事です。しかし、教科書に書かれていることは一番簡単な典型的な事例であって、基本中の基本に他なりません。「それは覚えて当たり前だよ」という前提に立って、さらに、私たちの身のまわりで起こっている複雑な現象に着目し、それを理解することで本質的な力は養われます。

化学は生活に密着した実学

とかく化学は暗記科目であると思われがちですが、東大や京大、慶應の医学部などの問題はいたずらに知識偏重主義の問題ではありません。基礎レベルの部分を本質的に理解できている人にはわりと簡単に解けるけれど、公式だけ丸暗記という勉強をしてきたような人では全く歯が立ちません。また、どれだけ教科書に書かれている法則や化学反応式を暗記しても、それらのほとんどは、自分の生活や将来に活かせません。

しかし、「現実とはとても複雑で、その仕組みはこうなっているのだ」ということを考える経験を積ませることで、より理解が深まり、活かせる知識を自分のものにできるはずです。そのためには、少し先の学問的な広がりを見せること、少し複雑で現実的なことを見せることが必要です。

「化学と私たちの人生とどんな関係があるの?」と思われる方もいるでしょう。しかしながら化学という学問は、私たちの生活に密着した実学です。化学的な視点で物事を見られるようになれば、不確かな今の時代を生きぬく上で大切な、物事の本質を見極める力が身につくはずです。そのためには、少し先を見ることで自ら考え、自分なりの考え方を確立させて答えを導く訓練が欠かせません。私は化学という学問を通してそこを伝えていきたいと考えており、



多様な実験用具の他、モニターに映し出される写真や映像を使った解説もグノーブルの化学の大きな特徴。実物を見ることでより一層理解が深まる。

またそれが、ひとつの教養になっていくのだと思っています。

実験を通して化学の本質を学ぶ

夏期講習を受講された生徒は、化学への興味に多少の差はあれども、難関中学の受験を経験してきた方が多いだけに、「Yes/No」で答えを求めるものや、公式・方程式を当てはめれば答えが出るような問題に関して、確実に答えられる力を持っていました。ところが、「なぜ船は鉄でつくるのか*」というような、あまりにも漠然としていて、いろいろな正解がある問題を投げかけてみると、最初から化学的な正解を導き出せた生徒はいませんでした。

もちろんほとんどの生徒は、ぼんやりとは理解しているのです。ただ、本質的な部分が分からないから答えが出ない。それでは難関大学を目指すための力にも結びつきません。こうした課題を解決していただくための試みが、実物へのこだわりであり、実験なのです。

しかしながら、実験を行って実物を見せるということは、安全面や準備の手間を考えればなかなか実現が難しいことです。おそらく他塾にはない試みではないかと自負しています。そこにあえて取り組んでいるのがグノーブルの化学の独自性といってよいでしょう。もっと長期的な視点を持って、受験生という枠を取り払って考えてみれば、私の学生時代がそうであったように、実物を見た時の衝撃や驚き、興奮のようなものから、将来化学を自分の進路にしようと考えてくれる人が出てくれば嬉しいと思います。

*なぜ船は鉄でつくるのか
鉄は安価で入手しやすいこと、加工しやすいこと、強度があることが理由です。また、表面塗装やステンレスなどの防錆技術も進んでおり造船の素材としてたいへん優れているのです。



Gnoble Cross Talk グノーブル対談 物理



岡崎 淳一朗先生

有川 誠之先生

有川 誠之 × 岡崎 淳一朗

時にはノーベル賞論文の 実験をも検証しながら、 生徒との対話を通じて 「なぜ」を解き明かす授業を展開

どの科目でも、先生との出会いによって、その後の展開を左右することがあります。こと物理に限って言うなら、「現象を公式で表すための数学力を強化せねばならない」や、「目に見えない概念を理解するのが難しい」という先入観もあり、まさしく出会い方次第では「敷居の高さ」を感じてしまうものです。グノーブルでは、生徒の皆さんは高2の夏に物理と出会うことができます。その出会いによって、物理の魅力を発見することができるでしょう。入試における大きな得点源に育てることもできるでしょう。そうした予感を、お二人の言葉に感じることができました。

(インタビュー：吉村高廣)

「なぜ、こう考えるのか」を理解する

岡崎：グノーブルの物理は今年(2015年・高2夏期講習)で四期目となります。高2の夏期講習からのスタートなのですが、ほとんどの方がまだ本格的に物理を勉強していません。また、他の塾で学んできたという方もいないようです。ですので、スタートラインは皆さん一緒です。

この段階での皆さんの共通の課題になるのは、物理の考え方を身につけることです。現実にかかる現象をどのように捉えて理解するのかという物理の考え方を知らないところからスタートしますので、すでに発見された法則をもとに現象を説明するのではなく、現象からどのように法則が抽出されるのか、物理の考え方を自然に身につけていけるように授業を展開しています。有川：岡崎先生の「考え方を知らない」という点を拡大して補足しますと、物理的な考え方だけではなく、我々からすると一般常識と思えるようなものも含まれます。たとえば、「夏と冬で気温が違うのは、夏は地球が太陽により近く、冬は地球が太陽により遠いから」と答える生徒がいます。これはもう学問の思考方法以前の問題です。

そこで様々な背景の生徒たちと授業を始めるにあたり、私たちの授業ではこれまでの知識はないものとして考えています。

岡崎：生徒の中には、天体の話自体に興味及ばず、「天体」という言葉が出た途端に思考停止してしまうケースも少なくありません。この場合、「天体が嫌い」=「物理が嫌い」となってしまうこともあります。物理という学問とは別次元の先入観によって、苦手意識を植え付けられてしまっていることが少なくありません。有川：そこで問題となるのが指導方法です。よくありがちなのは「この時期までにはここまで扱おう、ここまで公式を使えるようにしよう」と時間的な制約を設けて、公式をあてはめることに慣れさせる教え方です。

しかしながら、「なぜ、このように考えるのか」という説明は一切ない。たとえば、 9×9 は81ですが、9を9回足したら81になるのだということを教えずに、「 $9 \times 9 = 81$ と暗唱しなさい」と言っているような授業です。これでは興味の持ちようがありません。

物理というのは、意外かもしれませんが人の権力やエ



Nobuyuki Arikawa

ゴにまみれた学問で、公式を覚えて理解できるような学問ではありません。そもそも、我々が正しいと思い込んでいることも真実である確証はありません。そして正しいと思うことも、時勢によってころころと姿を変えます。そうしたとき「確証のないことをどうやって納得させるのか」というところがこの学問の本質です。そこで大切なのが、「なぜそれを思いついたのか」という部分を知ることです。

そう考えてみますと、「天体が嫌いだ」という生徒は、天体との出会い方が悪かったと言えるでしょう。真っ暗な川辺に行って夜空に瞬く星座を見て感動しない人はいないはず。そうした根本を抜きにして、「ここには何座があつて」と、いきなり丸暗記させられたら面白さを感じるはずがありません。

岡崎：全くその通りだと思います。天体に限らず、最初に教わった時の印象というのは非常に強烈で、そのまま心に残っていくものです。あるいは、小学校の時は理科が大好きだったのに、中学・高校と学年が上がるにつれて科学に対する興味を削ぎ落とされてしまうケースもよくあります。きっと、「九九の暗唱」のようなことが一部の教育現場で起こっているのかもしれない。

ところがグノーブルの物理を受けていただくと、「やっぱり理科って面白いんだ」と言っていたことが多くあります。それは、学者たちがどのような問題意識を持ち、どのように解釈して「自然」に迫っていったかということを引き伝えているからだと思います。先人の驚くべき着想によって他の現象が推察できるようになったり、今まで別個の事柄であると思っていたことが、共通のルールによって動いているのだと知るのは科学の醍醐味の一つです。そこをグノーブルではストレートにお伝えしています。「理科」の楽しさを味わってくれていると感じることがありますが、皆さん本当は、科学的な驚きに飢えているのです。

時代によって考え方が変わる面白さ

有川：伸び盛りの生徒は1を聞いて10を思いつくので、すべてを手取り足取り教える必要はなく、いかに気持ちに火をつけるかが大事です。そのためには、教える私たちの方に火がついていなくてはなりません。自分は答えを知っているから先生をやっているけれど、物理という学問にわ

くわくすることがないし、追求する熱意も失っている、というのでは成り立ちません。授業中に「なぜこのように考えるのか」を先生自身が説明できないことなど、あってはならないことです。

岡崎：大学入試の問題であれば、正解がはっきりしていて「なぜこう解くのか」ということが割と明確になっているものが多いのですが、現実の事象・問題には必ずしも明快な答えがあるわけではありません。ない方が多いでしょう。我々が理解している自然はほんのわずかです。ですから、私は「わからない」問題に対しても、どのようにアプローチしていくのか、根底にある法則・ルールは何なのかを見抜こうと試行錯誤する姿勢が大事だと考えています。物理の法則はそのように作られてきたからです。そしてそのことはただ純粋に楽しいことです。真実はこんなじゃないかということが発見できたかもしれないと思うときに、科学の面白さを感じるのだと思います。

ひとつのことが理解できれば、これまでわからなかった問題についても、何か違った視点でものが見えてくるようになります。ですから、すぐにわかることを求めるのではなく、わからないことを唸りながらも考えてもらいたいと思います。過程を楽しめる力を持ってほしいのです。

有川：物理学者は実験結果を見て、「こういう法則があるのではないか」と推論しますが、推論と結果がぴったり合うことはなく微妙なずれが生じます。ただ、「このくらいの

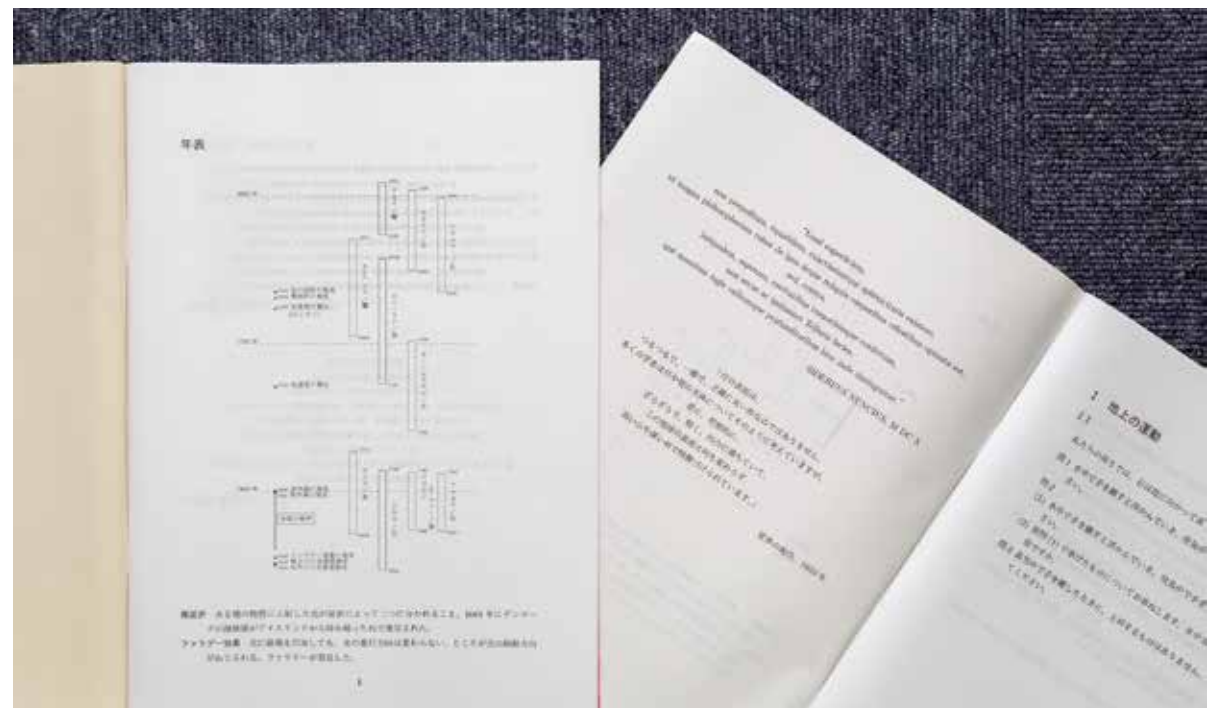
ずれならいいだろう」と考えながら結果を追い求めるのが物理という学問の特徴です。したがって学者は、自分が研究している法則が完全無欠の正しいものなどとは考えておらず、「自分は今、とりあえず近いものを見つけているのだ」という思いで突き進みます。ところが、そのアプローチは時代や社会状況で変化するのです。

そこを説明するために、私はよく放物線の話をしします。現在ならば、物を投げた時の曲線を $y=ax^2$ という関数で表すことができますが、歴史をさかのぼれば実にさまざまな放物線の考え方がありました。

まず紀元前にアリストテレスは、物を投げれば斜めに上がっていき、矢で射った鳥や雨は真下に落ちてくることから、放物線を斜めに上がって垂直に落ちると定義しました。

ところが、戦争で矢を用いるときは斜めに落ちてくるため、「それはおかしい」と異を唱える者が現れ、今度は「斜辺で上がり、斜辺で下ってくる」、これが定説となります。放物線の頂点が曲線になるのは、その説からだいぶ時代が進んでからのことです。

ガリレオが活躍する直前の1600年代は、曲線と言えば当時の人は円しか知りませんでした。したがって、物を投げたら斜めに上がっていった、空中で円に沿いながら方向を変えたのち、斜めに落ちてくると考えられていたのです。こうした曖昧さが、私は本当に面白いと思うのです。



グノーブルの物理テキスト。「物事をどのように考えて理解すべきか」を育む内容になっている。

答えは対話の中から導き出す

有川：物理を学ぶ上では時代背景が大事です。その時の社会情勢や、学者が生きた順番などによって物理の発展は大きく左右されます。たとえば、ニュートンの前にホイヘンスがいて、ホイヘンスの前にガリレオがいた。彼らがいなければ物理は発展しなかったでしょうし、もし順番が変わっていたら違う発展の仕方をしていたに違いありません。ここを理解することは物理を学ぶ上で非常に大事なポイントです。

また「社会情勢」も大きなキーワードになります。世の中で戦争や飢饉が起きると、そうしたもののから目をそらせたい人が増えて学問が盛んになります。物理的メカニズムの発見もこうした時代に数多く行われています。

そこで、テキストの最初のページでは、そのテキストに登場する学者が活躍した時代を年表で紹介して社会的な背景を学びます。さらに次のページでは学者の中から一人をピックアップして著書の言葉を入れています。この意図は、彼らが発見した時どれだけ興奮したのか、どれくらい戸惑っていたのか、あるいはどれだけ間違えて考えていたのかを、リアリティを持って知ってほしいからです。

また、テキストの中には、正解がない問題をわざと載せています。私たち自身、講義しながら「んっ？」と解説に詰まってしまうような問題です。

岡崎：私は有川先生が作成したテキストを初めて見た時は本当に驚きました。テキストの中に、まさに科学があるのです。答えがはっきりしない問題にも出くわします。そうした問題に行きあたった時にはどう授業したものかと悩みました。

ただ、そうした驚きと戸惑いがあったて試行錯誤を経てこそ、冒頭に申し上げた「物事をどのように考えて理解すべきか」という力が育まれると思うのです。それは生徒ばかりでなく、時として、私自身にも新たな気づきを与えてくれることもあり、生徒が興奮する前に私の方が興奮してしまうようなこともしばしばです(笑)。

有川：作成している本人ですらわからないのですから当然ですよ(笑)。問題を作っている時は、生徒の前で「こう話そう」と考えています。ところが、授業に入って話し

始めると、「いや、あの考え方は間違っていた。これは上手く話せないぞ」ということが多々あり、そこから生徒と一緒に悩み始めるのです。対話が始まるのです。そうこうしているうちに生徒の方が凄く着想で大正解を導き出すことがある。まさしく、「それだ!」という発見の瞬間です。

岡崎：特に、「物理が苦手」と言っていた生徒が会心の一撃を放つような場合は嬉しいですね。授業ではたくさん具体的な問題・事例を消化していきます。時には、ノーベル賞論文にある実験なども扱います。多くの事象、実験、問題を経て、確かな物理的思考力を育てていただくというのが私たちの役目です。

有川：私たちの授業は、考え方はこれで公式はこれ、したがってまとめ方はこれである、といった授業は絶対にしません。大事なことは、私たちと生徒の対話の中で、「こういうことだったのか!」と気づき、自分でまとめたいような授業をすることです。私たちの言葉でまとめちゃうのは簡単です。しかしそれでは授業が味気ないものになってしまい、後になってまとめだけを振り返ればいいということにもなりかねません。

特殊なことを教える場合に先生が、「一般的にはこうなる」という教え方をすることがあります。それはすべてに通用するような汎用的な公式を教えようという思惑があるからだと思います。しかし物理には汎用的な公式など存在せず、そこに至る

考え方の道筋を理解していなくてはなりません。したがって私たちの授業は、考え方の例だけを示して、一般化は自分たちでやっていただくようにしています。

グノーブルの物理は満点解答を狙う

岡崎：グノーブルの物理は、テキストの内容といい、授業の仕方といい、他とは全く違いますので、中には最初は不安を感じる方もいるでしょう。高2のスタート時点では、すぐに成績につながるような「処方箋」を求めている生徒も見受けられます。気持ちはよくわかります。

しかし、それでは結局これまで解けたレベルの問題しか解けるようにならないうえ、勉強そのものが作業的なものになり、科学本来の楽しさなんて味わえません。その結果、大学に入る力しか手に入れないと思うのです。大学に



Junichiro Okazaki

合格することは当然ですが、その後の大学での勉強や社会の中で活かせる知の力を養ってほしいのです。そう考えますと、「そうじゃないんだ、学問の仕方はこうなんだ」ということを伝えていくことに意義があると思います。

このような授業を進めていくうちに、生徒の心の中に、「グノの授業で大丈夫なんだ」という確信が芽生えているという手応えを感じます。受験科目としての物理というよりも、科学としての物理を楽しむことを優先してくれるのです。そうなってくればしめたもので、ともに科学する仲間としての対話が始まります。このような授業を1年以上受け続けてくれた生徒は非常にタフです。高3の9月から入試問題によるテスト演習が始まりますが、未見の問題であろうと、培ってきた推察力によって突破してくれるのです。**有川**：東大の入試問題を解くには、受験生なら誰でも知っているような法則しか必要ありません。計算が楽にできるように数値も工夫されています。ただ、見たこともないような状況の問題なので、どの法則をいつ使えばいいのか、筋道を立てて考えなくてはなりません。東大はそこを問うてくるのです。これは東大に限らず、国立大学全般に共通した傾向と言えるでしょう。

公式を頭に詰め込んでいれば、普通の学校の定期試験であれば対応できるでしょうが、大学入試で成果を出すのは難しいと思います。公式に当てはめるのではなく、自分で公式を導くほどの力があれば、物理は満点解答ができるはずです。グノーブルの物理は、東大であれ東工大であれ、満点解答を目指す授業です。考え方を知っていれば、満点がとれて当たり前と私たちは考えています。その考え方の根本を知るために、グノーブルではあえて「物理の歴史」を活用しています。では、なぜ歴史なのか。歴史を追うと、「なぜそう考えたか」が必然的に理解できるので、自分で容易に再現できる。したがって物理を学ぶ上で一番楽だと考えるからです。

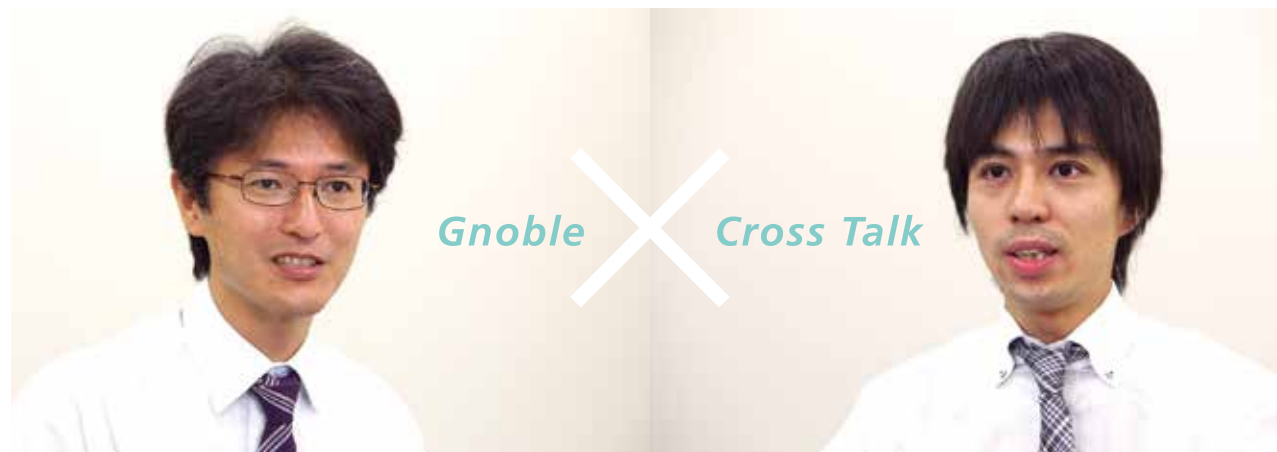
大学入試で理科は何を選択すべきか

岡崎：大学入試の理科には、物理もあれば化学、地学があり生物もあります。興味の対象の違いもあるので、何を選択するかはそれぞれでしょう。しかし、これから先々のことを考えたときに、将来いくつも現れるであろう正解のない問題に対するアプローチの仕方を、物理を学ぶことで習得できるのではないかと思います。

たとえば、物が落下するという現象について、アリストテレスは重い物と軽い物では重い物の方が早く落ちると言いました。しかし、後になってガリレオがそのことに問題意識を持ち、アリストテレスの論を否定します。つまり、物の落下速度は、その物の重さに依らないことを示したのです。ここまでは教科書にも書かれていること

ですが、グノーブルの物理の面白いところは、アリストテレスの論を改めて支持するような問題についてもスポットライトを当てることです。より現実的にはアリストテレスの方が正しい、というのも、前提条件を変えることで結果が変わるからです。自然をどのようにモデル化するか、切り取るかによって、結論が変わっていくということを見ていただくのです。

時代によって論証が書き換えられる様を見ていく中で、どのような前提に立ちそれが証明されたものであるのかを



とらえることが大切です。正解は決してひとつじゃない。そのことを物理という学問を通じて生徒には理解していただきたいと思うのです。将来皆さんが目当たりにする問題も同じように正解がひとつではない問題だと思います。しかし、ひとまずあるひとつの正解を導かなければなりません。このような時に、前提とするものは何なのか、問題の要素は何なのか、様々な側面から検討しながら問題を解決していく過程で、物理的思考が役立っていくのだと思います。

さらには、ガリレオが持ったような問題意識を持つことも大切です。誰もが当然と思っている中で、「いやしかしそこには問題があるのだ」と捉える問題抽出力は社会に歓迎される力でしょう。

本格的な物理の勉強を開始する時期として、高2の夏がちょうどいいと考えています。それまでは部活や学校行事が忙しい方も多く、高1からではかえって長すぎるように思います。時間ばかりあっても密度が濃くないと多くのものは得られません。

生徒が自ら身を乗り出して問題に取り組む姿勢と、こちらの姿勢がぴったり合った時に議論は面白くなっていくものです。お互いがしっかりと向き合える環境がようやく整い始めるのは、やはり高2の夏以降ということになるのではないのでしょうか。

有川：「大学受験で理科は何を選択すべきか」に対する私の

考えは、「どれを選んでもいい」というものです。ただグノーブル、私や岡崎先生と出会って、もし私たちを気に入ってくれたのなら、「物理を突き詰めてみようよ、面白いよ」と言いたいです。

つまり理科の科目ありきではなく、先に人間関係ありきです。では物理を選んだ場合に「成績を伸ばす自信があるか」ということになるわけですが、100%物理を好きになっていただく自信はあります。そして、好きになれば自ずと成績も伸びていきます。

また、物理を始める時期については、ほぼ岡崎先生と同じ考えです。補足するなら、高2の初めからでも高1からでも物理を学ぶことは結構ですが、タイミングが大事ということです。と言いますのも、物理では難解な数学を使わないからです。このあたりはかなり誤解されているところですが、重要なのは連立方程式と二次関数の2つ。中学の数学レベルです。時々、微積分を多用して問題を解くことを売りにしている塾がありますが、グノーブルでは微積分を使いません。

その代わり、数学の基礎である比例関係はわかっていないわけではありません。比例がわからなくても、何とか数学を

しのいでいる人がいますが、物理では難しい数学が要らない分、根本的な比例がわかっていないと手も足も出ません。「微積分がわからなければ物理はできない」というのは間違った思い込みです。その代わり、比例はわからなければなりません。

岡崎：有川先生が言われる「微積分」というのは、計算技術としての「微積分」ですね。微分計算、積分計算ができるというのは受験数学としてひとつの課題になり得るかもしれませんが、とすると先例のように「九九の暗唱」、「星座の丸暗記」のようなことがここでも起きています。

微積分の計算方法だけを教えられて微分計算はできるけれども、微分とは何かということがわからない、といったことが往々にしてあります。そして、そのような計算技術がなければ物理が理解できないというのは正しくありません。

しかしながら、アルキメデスやケプラーなどによって積分概念の根本が登場し、後になってニュートンが流率法という微分の源流のようなものを生み出しました。必要に迫られて積分・微分という考えが出てきたわけで、そういった意味では、物理の問題を通して微分や積分の概念を同時に伝えていくことも大事だと思っています。

そこでグノーブルでは、やっていることは微分だけでも「微分」という言葉はあえて使いません。微分計算をさせるのではなく、計算してみたら微分していたことになっているのだということに気づいてもらうのです。だから「微積分は要らない」という表現になるわけです。積分も同じことで、私は「足し算」としか言いません。小さな違いに思われるでしょうが、言葉の使い分けというのは、学問を行う上で理解度に大きな違いを生むものです。

有川：その通りですね。新しい言葉を入れてしまうと、その言葉に振り回されて、自分と切り離されたわからないものになってしまいます。先ほどの「天体」と同じように、先入観で「物理は難しい」と考えてしまうケースもあるでしょう。そうさせないためにも、私たちが生徒と向き合うときに、よりわかりやすい伝え方をすることは重要なことです。

歴史をたどって学ぶことで、物理が体系化されました。

きたみ しゅんや
北見 駿也さん(東大理科II類1年・筑波大附属駒場出身)

物理の先生も一人ひとりをよく見てくださいました。高3の秋に文化祭でものすごく忙しくて授業に行けなくなってしまった時にも、大丈夫と言ってもらえたので、安心して文化祭にのめり込めました。

グノの物理は授業の進め方が独特です。毎回配られるテキストには年表が書いてあるんです。物理の歴史に沿って展開していく授業だからです。物理は、前の時代に科学者が考えた事柄を、次の時代の科学者がさらに進めることで現代につながっています。それをたどっていくのは、第一にとっても理解しやすいし、時には物理学を先に進めた科学者の人間性まで感じられました。自分の中にしっかり物理が体系化されました。

1つの道具で、類似性のある 10のミッションをクリア 「論述する力」を、確実に身につける

「数学は受験の時だけ必要な科目」、時として発せられる言葉であり、世の中ではそのように考える人が少なくありません。どれだけ多くの公式を暗記しても、その解法がこれからの人生に役立つことはないのだと。そもそも、なぜ数学を勉強するのだろうか、数学を勉強する意義とは何なのか？

数学とは、公式の暗記を軸とした模倣処理作業ではなく、仮説を立てて、答えを導き出す論理的思考法に基づいた解決計画立案のフィールドワークなのです。そしてその鍛錬を行うことが、人生をより有意義なものにし、数学をもっと楽しいものへと変えるのです。

受験数学の本質を知る

今年、私の授業を受ける生徒にあらかじめ心得ていただきたい事柄をまとめた『受験数学ストラテジー』という小冊子をつくりました。

高2までの授業は、先生が講義をしてその対応演習を繰り返すことで基礎力をつけることがメインです。ところが高3になると、それまでの学習で蓄積されているはずの知識が、目の前の問題に应用できないという悩みが生徒の中で表出します。それを、いかにして使えるようにするかという部分に集中してアプローチするのが高3からの受験数学です。

IA・IIBは、とりわけその性質が強く、使う道具自体は平易で分かりやすいものですが、使い方に関する技法の本質的な理解が求められます。ここで問題になるのが、「なぜ使えないのか」を生徒自身も分かっていないケースが多いことです。高3の前期授業では、その問題に対する切り込みを、授業の枠いっぱいを使って行います。その後、後期授業では徹底した演習授業を行い、前期までに身につけた道具について有効に使いこなせるだけの力を演習していき、各大学が入試問

題を通して要求する課題を突破する力と自信を身につけていくのです。

知識だけでは制圧できない ミッション

生徒たちの当面の目的はテストで良い点をとることだと思います。ところが、あらゆるミッション(問題)をクリアしきれぬ確信がない。つまり、相手によってはできる時もあるけれど、どんな相手に対してもいつでも勝てる自信が持てない。ここが受験数学に対する抵抗感につながっているように思われます。問われていることが分からない、理解するのに時間がかかる。それは世間一般で言うところの数学嫌いが理由でしょう。

しかし、グノーブルに通っている生徒ならば、何を問われているかは問題を読めば分かります。読めば分かるけれど、上手に答えが出せないことに対するボンヤリとした不安感があるのです。とくにできる生徒ほど、そう感じることもあるようです。平均的に見ればテストで良い点をとれているのだけれど、時として全く無力になってしまうこともある。つまり、知識だけでは対応できないと実感しているからこそ、そこから先どう進めばよいか方法論が見つからない。いくら勉強量

を増やしても自分一人では解決のしようがないともがいているうちに、底なし沼にはまり込んでしまう生徒が多いのです。

論理的思考の必要性

「物事を論理的に考えられ、自分の力で問題を分析し、解決する能力を身につけてもらう」ことがグノーブルの考える「数学」です。生徒の将来、大学生、社会人になってからも役立つものの考え方、見方を身につけていただくことが趣旨なのです。

東京大学の「アドミッションポリシー」の「高等学校段階までに身につけてほしいこと」の一節に「数学的に問題を解くことは、単に数式を用い、計算をして解答にたどり着くことではありません。どのような考え方に沿って問題を解決したかを、数学的に正しい表現を用いて論理的に説明することです」とあります。

まさに受験数学の中には、単純に数学的な技法や知識を問われる問題もありますが、とりわけ東大の問題で要求されるのは、知識の多寡ではなく、知識をいかに運用するかが問われます。いわば受験数学の世界で言うところの「やさしい良問」です。これは、難解

数学とは
論理的思考法に基づいた
解決計画立案の
フィールドワーク

長澤 通俊 (数学科)

であることを善しとするのではなく、解き方だけを見れば当たり前の手法を使っているのだけれど、その当たり前のことが易々とは出てこない盲点を突いた問題です。こうした相手に向き合う時に求められるのが「論理的思考力」です。

そこで、「論理的思考力」にスポットを当てて、可能な限り簡単な道具を用いて要求に応えられる力の習得を授業では目指します。そこには私自身が文系の出身で受験数学にコミットしてきた経験が生きていると思います。

授業のなかで極めること (ねらい)

1. 「ノートをとる」ということ (論理的思考の確立)

一般的に数学の授業では、黒板に書かれているのは数字であり数式です。それは完全に異文化の言語であり、「自分たちの思考とは乖離するもの」という印象を受けやすく、また実際に、何を言っているのか分からないというケー

スも少なくありません。しかし、受験の必要科目である以上、「数学とはそういうものだから仕方がない」という割り切りにつながっているところが多分にあります。そうした先入観を取り除き、自然なものへ取り戻すためのひとつのきっかけにしているのが、黒板を日本語で埋め尽くす、まさに「量みかける日本語授業」です。

本来なら解説で話し飛ばしてしまうような部分までこと細かに板書します。それは、復習時に授業が再現できるようなノートをつくってもらうためでもあります。受験数学の基礎体力が備わっていないうちは、情報の取捨選択が甘く、「それほど大事じゃない」と思い、聞き飛ばしてしまうところにも、実は重要なことが多分に潜んでいます。したがって、高3のスタート段階においては、話したいことが10あれば9割5分は板書に費やすような授業をします。

私の学生時代を振り返ると、こと数学に限って言うなら、家に帰ってノートを広げてみても復習に役立つような

ことが書かれていたためしがありませんでした。したがって、参考書や教科書など、知識がはっきりとした形でまとめられたものを見ることでしか受験数学の技術は身につけられないと考えていました。

そうした学習ノートとは、はっきりと線を引きたいという思いもあり、日本語板書にこだわっています。もちろんノートのつくり方も細かくアドバイスします。それらもすべて、自分の反省や指導経験に基づいています。やはり自分で真に実感できたことしか魂を込めて伝えることはできません。

少なくとも授業でやった部分については、板書を書き写したノートさえ復習していれば必ず理解できるはずです。ここについては自信を持っています。おそらく合格者の皆さんがそれを一番実感しているのではないのでしょうか。高3前期と夏にノートに書き写した知識だけを用いれば、後期に取り組むテスト演習でも、「なんだ、全部やったことばかりじゃないか」と思えるはずです。

2. 徹底した事前予習型授業 (高3後期テスト演習までの序章)

1回の授業は延長をしてもわずか3時間弱といったところです。限られた時間の中で、問題を読み、把握して自分なりに仮説を立てようとする時間がかかり過ぎてしまいます。そこで私の担当する高2・高3前期の授業では、授業の内容を濃くするためにも事前予習をしていただき、それに対するチェックシートを提出してもらうようにしています。

予習内容は、テキストを中心に10問ほど問題を選びすぐ提示します。問題は、一問一問に何かしらのメッセージが含まれていて、テーマ性のあるものを抽出するわけですが、その問題をどう解いたか、解けなかった問題についてはどこで詰まったのか、解けない理由はどこにあると思うかなど、自分なりの分析を書いてもらいます。

最初のうちは「(1)は解けた。(2)はできなかった」といった程度のもですが、それが徐々に、「(2)が分からなかったけれど、おそらくここが原因ではないかと思う。でも、それを解消する手段を知らないのて教えてほしい」と、自分なりの分析と要望が明確に書かれるようになります。

ここがとても大事なところで、こちらが教えるだけでなく、生徒自身の意識が変わり、食いついてくる姿勢がなくては、学習効果は上がりません。それをしっかりやり込んできた人であれば、黒板に書かれていることの有用性や自分が持っていなかった視点に必ず気づくはずです。自分の中から湧き上ってきた問題提起に勝るものはありません。それに対する答えを提示するのが授業の場なのです。

この予習型授業は、高3後期からのテスト演習のために行われているもので、演習授業は磨かれた技術(道具)を携えてこそ意義を持ってくるのです。

3. 教えすぎない不親切の演出

先生は生徒の伴走者であることは間違いありません。ただし、長い道のりを最初から最後まで一緒に手を携えてゆくのが良い伴走者であるとは思いません。なぜなら大学受験の本番で頼りになるのは自分だけだからです。したがって、ある時点まできたら先生はフェードアウトし、生徒の後ろ姿を見守ることが大切だと考えています。もちろん、思考の導入部分からこれをやってしまったら、「分からないよ」で終わってしまいます。ですから、入口は示す。中盤までも誘っていく。ただし、そこから先は一人で歩くのを見守る、といった引き方です。むろんさじ加減はあって、基礎クラスになるほどゴールに近いところまではリードします。

しかし高3の夏ごろは、原則に従ってやっていけば答えが出せるころまで力をつけています。したがって、クラスによってどこまで伴走するかに違いはあっても、最初から最後まで手取り足取り解説をすることはしません。最後は自力で歩いてフィニッシュすることが大事だと考えています。

4. 演繹的思考の習得 (道具の活用者へ)

受験数学には、究極的なことを言えば、押すべきスイッチが用意されていて、それを押したら解けてしまうように、大半の問題はパターン化されたひとつの型のようなものがあって、流れで問題を解くことができるシステムが構築されているはずだと考えられています。そのシステムに従ってさえいけば、類似性のある問題と向き合ったときに、反射的に対応できるように、正解を導き出せると思ひこみます。

ところが現実には、生徒の多くが反射的に対応できないことに直面します。なぜ対応できないのか。それは、自分で仮説を立てて、失敗し、その失敗



Michitoshi Nagasawa

の原因分析を行い、修正を施すといった論理的に考えて答えを導き出す試行錯誤の訓練が足りないからです。

先述のパターン化システムとは、受験レベルをピラミッドで見た場合、中腹あたりまでのレベルには対応できるのですが、東大を象徴とするような「未見の問題への建設的対処力を要求する大学」の前では思考が止められてしまいます。

これは日常生活においてもままあることで、同じような思考回路で取り組むことを定義づけているのが演繹的思考の習得です。そしてそれは個人に備わった特殊な能力ではなく、後天的に鍛えることができる能力です。授業ではそうした力の習得を目指して、それが習慣化されれば数学は格段に面白くなるはずで

5. 意図的に多くの失敗を経験してもらう

人は、自分が思っている以上に知らないことやできないことが多いもの

です。時として、ひとつの失敗はコンピュータのOS(オペレーティングシステム)の入れ替えをするくらいの大規模な自己改革を求められる場合もあります。だからこそ、あえて失敗を経験することが必要ですし、その失敗の中から新たな気づきが生まれるものと考えています。

その演出として、高3の春期講習では、いきなり60分のテスト形式演習から授業が始まります。出題する問題は、その時点の実力でも対応可能な問題です。ところがここで、「もっとできると思っていたけれど、ぜんぜんできない」という人が出てきます。つまり今まで持っていた常識を揺るがすことが私の授業の第一歩です。少し意地悪なやり方ですね(笑)。

しかし、大学受験を終えると、「あの経験があったからこそ」と言ってくれる生徒も少なくありません。最初は打ちひしがれた方々でも、半年くらい向き合っていると徐々に成長していきます。そこで、模試のような形で外気に触れてみると、「あれ? ぜんぜん簡単じゃない」ということになる。またそうした経験は、彼ら彼女らが大学生になって、あるいは社会に出てからも必ず役立つことだと確信しています。

ここ数年、授業で学んだことが他の科目でも役立ったということを耳にするようになりました。それはまさしく本意を得たりです。受験数学そのものを教えているのではなく、思考の方法論を教えているのだと考えています。そうした思いが生徒たちに伝わった時はとても嬉しいと思います。

数学に携わる面白さ

私は中学受験を経験していますが、受験勉強をしている中で段違いに興味を持てた科目が算数でした。散らばっているものぐいいところに収まっていくパズルというか、きちんと筋道を踏んでいって、収まるべきところにきれいに収まるその気持ち良さが大

好きでした。それが数学になり専門性の高い知識が必要になると、若干収まりの悪い連中が現れてきましたが、私の中では、明快な因果律の中に収まっていると感じられて、むしろ白黒ははっきりつけられるところが好きでした。

そうしたバックグラウンドがあって今の自分を考えると、教える者として数学に携わる楽しさは「生徒ありき」と言うことができます。学生の頃は自分で問題を解いて楽しいと思っていた数学ですが、人を教えるようになってからは、「どうしたら生徒を変えられるのか、ともに成長できるのか」という問題を真剣に考えるようになりました。今では「実際に変えることができるのだ」という手応えを感じることができるようになり、それが充実感に変わっています。

数学に対するガチガチの先入観を持っている生徒に対して、どんな仮説を用いて向き合えば変わっていくのか。それが数十人という集団授業の中で、どれだけ一人ひとりに合うものが提供できるか。その一方で、個別指導とは異なる部分で最大公約数としての正解は何なのか。そうした課題に対して、1年ごとに新しい仮説を立てて臨んでいますし、失敗したところを踏まえつつアップデートしていくことにも手応えを感じています。また、ここ1、2年はその方法論の正解らしきものに近づいているのではないかと

生徒に伝えたいこと

授業に出て最初の1か月は、大きな不安を抱くことがあるかもしれませんが。あと1年しかないのに、黒板にいきなり日本語ばかり書かれて、「これは数学じゃないだろう!」など、いろいろな感想をもって授業を受けることがあると思います。そこで、「このままでいいのだろうか?」と考える人も少なくないはずで

1か月に4回の授業があるとなれば、

1回目、2回目では予習内容をふまえた上での基礎講義をテーマ提示から定石対処法紹介まで細かく行います。次の3、4回目の授業で実践演習に当たってみると、生徒は「これは全部習ったところに収まるじゃないか!」という驚きと実感が持てるはずです。まだまだ小さな世界かもしれませんが、「これか!」という思いが芽生えてくるのです。そうした実感を一度持てれば、「他の単元でもきっと同じようなことがあるはずだ」「このまま行ってもいいのではないか」と考えられるようになります。それが最初の1か月間です。

最初の1回や2回だけを見てしまえば、数式すら書くことなく、日本語だけを必死に書くことだけで一日が終わったということになってしまいますが、1か月間をトータルで見えていただければ、収まりの良さは必ず納得していただけると思っていますし、生徒自身の数学観が変わる予兆が見いだせるものだ

と確信しています。また、グノーブルは、「受験をゴールとして、それを達成するために必要なことだけ教えます」という塾ではありません。高校生になって受験が頭にちらついてくると、「これは意味がある」とか「これは意味がない」といって物事を簡単に切り捨てることがあります。有意義か無意義かを問いたくなる気持ちはわからないではありませんが、目の前のテストで良い点を取るためだけに意義の有無を語るのではなく、もっと先々のことを考えて物事の意義を考えることが大事だと思います。

これからは、人と同じようなことができるのではなく、人と違ったことができる能力を求められる時代になっていくでしょう。そうした時代が控えている中で、自分が受験数学を教える上で何ができるのかと考えた時、当然ながら、短期的には大学受験の数学で点をとれるようにすることもあるのですが、その後にも残っていく「何か」、すなわち「人生を生き抜くための知恵や問題解決能力」が伝えられたらいいなと思っています。

大学受験に役立つ力はもちろんのこと、人間形成の上で大事なもののまで授けて

いただけました。

今年の保護者座談会には、「東大合格特集号」(Gno-let vol.15)にご登場いただいた近藤雅貴さん(理Ⅰ・開成出身)、野田早紀子さん(理Ⅰ・東洋英和女学院出身)、森裕菜さん(文Ⅱ・桜蔭出身)のお母さま方にお集まりいただきました。

お母さまたちのお話によると、わりとマイペースで受験期を過ごしつつも、それぞれに課題と向き合い、それぞれの方法で課題を乗り越え、そこには明らかにグノーブル効果があったそうです。今は晴れて東大生となった3名のお母さまの受験期レポートを、今年もお届けします。(取材・文：吉村高廣)

◎ご出席いただいたお母さま：近藤 淳子さま 野田 陽子さま 森 洋子さま

東大に入学して

近藤：とにかく家にいないですね(笑)。アメリカンフットボール部に入り、戦力を分析するアナライジングスタッフの修行中です。高1くらいからアメリカンフットボールに興味を持ち始め、東大にご縁があったらWARRIORS*に入り、アナライジングスタッフとして活躍したいと考えていたようです。WARRIORS以外にもバトミントンのサークルに参加したり、アルバイトをしたりで毎日フル活動です。勉強の方はどうなるやら疑問ですが、存分に大学生活をエンジョイしているようです。

*ウォリアーズ。東京大学アメリカンフットボール部。関東学生アメリカンフットボール連盟一部リーグに所属。

森：うちもほとんど家にいません(笑)。アカベラのサークルに入っていると、グノーブルで教えていただいたTED*に興味を持って、TEDxTokyo*のサークルにも参加しています。もともと社交的な方なので、新しいお友達もたくさんできてそれが嬉しくて仕方がないようです。いろいろなことに興味を持って本当に忙しくしています。ただ、「ちょっとキャパシティオーバーじゃないかな?」とも思いますが、本人が楽しくやっている

ので任せています。

*テッド。「広める価値のあるアイデア」を共有しようという精神のもと、様々な人がプレゼンテーションを行うイベント。
*テデックス・トーキョー。TEDxはTEDからライセンスを受けた団体。TEDxTokyoは、米国以外では最初のTEDx。

野田：お二方のお話をお聞きしていて、「娘も同じ大学なの?」と思うほど、いつも家にいます(笑)。建築関連の授業をとったところ、モノづく



近藤 淳子さま
近藤 雅貴さんのお母さま
東京大学理科一類
(開成出身)



りの課題が頻繁に出るようで毎日家で何かをつくっています。もちろん嫌々やっているわけではなく、本人はとても充実しているようですが、教習所に通う余裕すらなかなかありませんし、オーケストラにも入りませんでしたので、エアバイオリンみたいに家の中で練習しています。大学生になったら、家でご飯を食べることも少なくなるだろうと思っていましたが、毎日家で食べています。

受験期の様子

野田：あまり辛そうな姿を見せることもなく、学校の先生からも「悲壮感なく元気に勉強しています」とおっしゃっていただいていたので心配することはありませんでした。もちろん上手くいかないこともあったのですが、親に頼ることはほとんどなかったです。見た目より案外繊細なところもあるのですが、それでも弱みを見せるのは悔しいという負けず嫌いな部分も持ち合わせているので、たいていのことは自分で消化していたようです。

森：うちはわりとお気楽というか、グノーブルの合格特集号でも本人が話していましたが、受験期もテレビを見ていましたし、お風呂にも

ゆっくり入っていました。英語の音読をしている声も聞こえていたので、本人は勉強しているつもりだったかもしれませんが、お風呂タイムは1時間近くかけていました。最後までそんな感じでしたので、少しハラハラするようなこともありましたが、主人も私もあれこれ言うことはしませんでした。学校のお友達もカリカリしているかと思いきや、意外にのんびりしていたようです。情報交換もお友達同士でやっていたようで、親が入り込む余地がさほどなかったというのが正直なところでした。

近藤：うちも全くとっていいほど悲壮感はありませんでした。見た目は細いのですが、メンタルは結構太い子なのです。最後までマイペースで、こっちの方がよっぽど「どうしよう!」という感じでした(笑)。



野田 陽子さま
野田 早紀子さんのお母さま
東京大学理科一類
(東洋英和女学院出身)



英語などは、「グノーブルの一番下から最上位までコンプリートしたのは自分くらいだ」などと言っていたので胸を張っているようなところもあって、私も受験期の子どもを支えるのは初めての経験でしたので、「どうなることやら」と思っていました。ただ、受験勉強のことを細かく聞いても言わないことはわかっていましたので、なるべく関係のない話をして、家ではリラックスできるように努めていました。

不安な姿を見せたあの時

野田：長女もグノーブルでお世話になって慶應女子から慶應医学部に進学しましたし、私は、早紀子にも医学部に進学してもらいたいと希望しておりました。娘の進学先に関しては娘の考えを尊重するつもりでしたが、1月のうちに試験のある私立医学部を受験しようと親子で話し合いました。幸い、その合格をいただけて私の方はほっとしていましたので、娘は東大には自分で頑張るしかないと感じていたと思います。ですから、私がした直前のサポートといたら、風邪を引かないようにとか、毎日の食事に気を配るとかぐらいです。

娘はグノーブルの先生にご相談させていただいたり、掛かり付けのお医者様にも不安な気持ちを聞いていただいたりしていたようですが、そうした状況は上の子の受験の時にもあったので、私はさほど心配もせずいました。もちろん娘の気持ちが揺れていることはわかっていたのです。受験生の場合、気持ちの波というのは多かれ少なかれ誰にでもあるでしょうから、娘か

ら何か言われれば、「そうだね」と同調して気持ちを落ち着かせることくらいはしますが、それ以上のことはあえて言わないようにしていました。皆が皆というわけではないでしょうが、親があれこれ言うよりも、親以外の、よくわかってもらっている大人に相談して言葉をもらった方が子供も納得するのではないのでしょうか。
森：夏休み前のことですが、一度だけ娘が気持ちの動揺を見せたことがあります。娘から地理のことで相談を受けたときに、「自分で勉強すれば大丈夫じゃない?」と応えました。一人で計画を立てて勉強をすることも大学進学後を考えるといいことだという思いが私にはあったのですが、急に娘が涙を見せたのです。

そこで初めて地理も塾に通いたいという娘の気持ちがわかりました。考えてみると、娘は一人で参考書を使った勉強よりも、先生とコミュニケーションを取りながら学んでいく方が深く学べると感じていたのだと思います。先生とのやりとりをしながら全体像をまとめていったり、疑問に思ったことを先生に質問し



森 洋子さま
森 裕菜さんのお母さま
東京大学文科二類
(桜蔭出身)



ながら掘り下げたり、というのが彼女の勉強スタイルだったので、だからグノーブルも好きだったと思います。あの時は、そのあたりの微妙な意思疎通が上手いきませんでしたね。

近藤：うちは男の子だからか、あまり気持ちの動揺を見せることはありませんでしたが、思い返してみると二度ほど「あれ？」と思うことができました。模試の成績が芳しくなく、もちろん自分からは言いませんが、部屋に入ると私に見てほしいかのようにならず置いてあるのです(笑)。当然私もそのことには触れませんでした。年が明けてからポロリと、「模試が悪いんだよね」とこぼしました。その時は、「中学受験の時も模試の成績は良くなかったけれど合格できたから大丈夫じゃない」と、内心はハラハラしつつも平静を装っていました。口にして気が楽になったのか、それ以降は淡々と勉強を続けていました。

もう一度は、センターの後です。帰ってきた時は普通にしていました。ところが学校で自己採点を提出する登校日がありまして、その時に仲間内でいろいろな情報が飛び交ったようなのです。後期の出願について気持ちの揺れを見せていましたが、出願先を決めたら後はまた普段通りに戻っていました。

父親との接点

近藤：主人は単身赴任をしております。週末だけ家に帰ってくるという生活スタイルですから、中学受験の時から受験担当は私です。気になることがあれば週末に私が報告していましたから、主人と息子が直接受験のことについて話し合うことはありませんでした。

ただ、センター直後に自己採点のことや息子の様子を話したところ、今まで直接関わってこなかった分だけ主人の方が動揺してしまいました。「僕の頃は……」と共通一次の頃の話

を持ち出したり、合格していた私立に学費を納めて仮面浪人をする場合の心配を始めたりで、そっちの対応が大変でした(笑)。「今あなたが何かを言っても好転するとは思えないので、二次試験が終わるまでは余計なことは一切言わないでください！」と強く釘を刺しました(笑)。

森：うちの主人は全くノータッチでした。12月くらいに学校に提出する受験校一覧表を冷蔵庫に貼っていたところ、それを見て初めて自分の娘が東大を受験することを知ったくらいです。そこには受験日も書いてあるので当然「わかってきているだろうな」と思っていたら、受験日前夜にお酒を飲んで遅く帰ってきたりして困ってしまいました(笑)。

よそではご主人がかなり深く受験に関わるご家庭もあるようで、インターネットで大学のことを綿密に調べて具体的なアドバイスをされるなど、受験に対してかなり積極的に関わりを持たれる方もいらっしゃるようですが、うちでは全く逆でした。

野田：うちも、普段の受験勉強には関わることはありませんでしたが、「頑張っているね」と娘に声をかけるようなことはよくありました。ただ、私大の医学部受験の時に、願書の書き方や面接の練習などをとてもしっかりとやってくれたことで娘も自信が持てたようです。その時ばかりは「ババすごいね！」と言っていましたし、そのおかげで私大の医学部に合格できていたため、焦らず東大に向けて勉強できたところはあると思います。

グノーブルに決めた理由

野田：上の子は医学部を志望していましたから、慶應の内部進学と同時に外部受験も視野に入れて、中学のうちから英語と数学を強化しておく必要がありました。私がネットであれこれ探した結果グノーブルに行き着いたのです。英語の授業について

いくのには相当苦勞していたようでしたが、先生の手厚いサポートもあり高校になって格段に力が伸びました。ただそれ以前も、学校の英語はそこそこの点数を取れていたのです。グノーブルに来なければ本当の力がついていないことに気づかなかったと思います。

早紀子の場合は、英語に力を入れている学校でしたので、近所の英語塾に通っていただくといいと思います。最初は数学だけお世話になっていました。ところが英語の講習を受けたところ、「全然ちがう！」と娘が言いつつ、姉も通っていい塾だということも本人も知っていたので英語でもグノーブルにお世話になることにしました。

森：娘は中3まで塾には通わないと言っており、いろんな塾の季節講習だけ参加していました。高1になって周りのお友達が本格的に塾に通い始め出す時、それまで体験した季節講習の手応えから娘自身がグノーブルに決めました。実は、私は私で勝手に塾選びをしていまして、グノーブルに白羽の矢を立てていたのです。音読やシャドーイング重視の指導方針で個人的には「ここがいいな」と思っていました。塾に行くのは娘です。本人に任せていたところ、娘も迷わずグノーブルを選びました。娘は人が好きなのかもしれません。娘は人が尊敬できるからついて行く、頑張る」というところが中学受験の時からありました。結果的には私が期待していた以上の成果をいただけました。勉強面だけでなく、親が教えられない知識や教養など人間形成を行う上で大事なもので授けていただけたと思っています。

近藤：グノーブルを選んだ理由はいくつかあります。まず、息子は中学のころ英語をしっかり勉強していなかったこともあり、高校になったら塾に通うことが家では暗黙の了解になっていたのです。本人は高校に入ってもなかなか腰を上げる気配がなく、

私のネットワークの中で英語の塾を探したところ、評判が良かったのがグノーブルでした。説明会に出席してみましたら、大学進学後のこともしっかり見据えた方針がわかり、親子ともたいへん好感を抱きました。グノーブルの先生が生徒の名前を覚えてくださるといっても大きなポイントでした。私の中では、そうした環境こそが塾の理想像です。息子が力を発揮するためには先生との距離が近いことが大前提でした。

それともうひとつ、中学受験の頃に取り寄せていた受験情報誌にグノーブルの広告が載っていて、そこに、日米学生会議に参加された開成出身で東大生になった高田修太さん*のことが紹介されていました。実は、息子がまだ小学生の頃でしたが、開成の文化祭を見に行った時に、高田さんがマジックをやっていたら、あまの腕前に思わず、「どこで学んだのですか？」とお聞きしたところ、海外のサイトにアクセスして覚えたとおっしゃっていたのが強烈に印象に残っていたのです。その高田さんもグノーブルで学んでおられたという偶然もあって、「グノーブルなら間違いなし」と直感しました。

*Gno-let vol.12のOBインタビュー「僕らが参加した日米学生会議とは」にご登場いただきました。

子供を変えたグノーブル

野田：もともと英語が好きな子でしたが、ますます好きになったようです。グノーブルで学んで、常に英語に触れることの大事さがわかり、音読は欠かせませんでした。私は「文章を読んでいるだけで効果があるの？」ということもありましたが(笑)、どんなに忙しくても寝る前には必ずプリントを読んでいました。今でも当時のプリントを引っ張りだして音読をしていることがあります。「続けないと英語を読む速度が遅くなる」と言っています。

音読のことで言えば、娘は大げさ

にやるのが好きで、「ちょっとママ、聞いてくれない」と私の前で、まるで芝居をしているように音読をします。夜遅くなると相手をする私の方が眠くなってしまふこともありましたが(笑)、楽しげに音読をする娘の姿はとても生き生きしていました。

また、プリントで取り上げてくださる英文の内容がとても新鮮で、さすがに受験期はあまり新聞を読む時間ありませんでしたが、英語の授業を通して、世の中で起こっている出来事や、いろいろな知識を教えていただけることをとても楽しみにしていました。

森：親から見るとまだまだ子供で「幼いな」と思うことが多々あります。ただ、合格体験記やグノレットの合格特集号などでも、自分のことを冷静に分析して、案外的確に言葉にできているのではないかと思います。それはやはり、グノーブルで魅力的な先生方から教わったさまざまなエッセンスが蓄積できていて、それをアウトプットする力もついたからだろうと思います。

娘は慶應の経済も受験し、グノーブルで東大国語を学んだ以外はほとんど対策もせずに臨んだにも関わらず、ちゃんと小論文にも対応できたようです。親が思っている以上に書く力が備わったのではないのでしょうか。

きっと最初は先生方をお手本にして真似から入るのだと思います。文章の書き方はもちろん、先生の話し方や考え方、パフォーマンスを真似ているうちに、それが自然と自分のものになっていくのかもしれませんが(笑)、素晴らしいお手本となる先生方のいらっしゃる塾で学んで、本当に良かったです。

先日、東大で提出課題になった4分半の英語スピーチも、4分半も何を話すのかしらと私は思っていたが、娘は苦勞している様子もなく仕上げていました。グノーブルで英

作文も鍛えていただいたし、声に出して英語を話す習慣もつけていただいたのは大きかったと思います。

近藤：まず言えるのは、グノーブルがなかったら東大合格はありませんでした。とくに英語の成績が壊滅的で、本人もすっかり苦手意識を持ったままこちらでお世話になったので、何より英語の力を伸ばせたことが大きな変化です。

英語の教材がタイムリーで、英語への興味をつなげられたのだと思います。テレビでニュースを見ながら、「あ、これグノでやった」と息子が言うようなこともありました。添削を通して一人ひとり細かく見ていただけたことにも、とても感謝しています。毎回の的確なご指摘や励ましのコメントで、このレベルまで引き上げていただけました。



入塾当初は一番下のクラスでした。そこからクラスを上がったたり下がったりしてなかなか成績が安定せず、個人面談をさせていただいたこともあり。先生からいただいた言葉に私も納得して、細かいことは言わずに見守っていました。最後のクラス分けテストでは、いきなり最上位のクラスに上がり、本人よりも私の方が驚いてしまいました。ところが息子は、自分から申し出てクラスを下げていただいたのです。私としては、「どうして？」という思いはありましたが、その頃には息子も冷静に自分の実力を見極めることが

できるようになっていたのでしょう。地に足をつけて力をつけていきたいという本人の決断を尊重しました。

グノーブルの先生

近藤：もともと数学は得意で好きな科目だったのですが、グノーブルの数学を息子はすごく気に入っていました。息子の通っていた学校では他塾の数学に通っている方が多かったのですが、「僕にはグノの数学が合っている」と言って、その姿勢は一貫していました。グノーブルの数学は、彼にとっては塾というよりもサークル活動のようで、まるでスポーツを終えたような爽快な顔をして帰って来ていました。かなり遅くなくてもご機嫌で帰宅というのは最後まで変わりませんでした。数学に全力で取り組める環境だったということもありましたが、受験以外のこともいろいろ先生とお話しさせていただいていたようです。

東大の二次試験の10日ほど前、下見を兼ねて本郷キャンパスを訪ねた時に、あるコンビニの前で「ああ、ここか」と息子がつぶやきました。どうやらお世話になっていた数学の先生が試験当日応援に駆けつけてくださり、そのコンビニの前で待っているという約束をしてくださったらしいのです。日ごろからマイペースで淡々としているようにも見えますのですが、やっぱり先生と会えることを心強く感じ、楽しみにもしているのだなと、その時は息子の違った一面を見た気がしました。

もう一言付け加えさせていただきたいのは、グノーブルでは先生同士が連携を取ってくださっているということです。数学と英語に加え、古文でもお世話になりましたが、私が個人面談をお願いしたときに、科目を越えて先生方が雅貴のことを見てくださっていることがわかり、グノーブルに対する信頼の気持ちがさらに増しました。

森：私は先生方にお任せしきってい

て、個人面談もお願いしたことはありませんでしたが、本人が満足して通っていたので何一つ心配はありませんでした。娘の口からは、国語の先生の話も、英語の先生の話も、本当によく出ていました。うちの子もグノーブルから帰ってくるといつもご機嫌で、「話したいことが山ほどある！」という感じで話は尽きませんでした。グノーブルで勉強することがよほど楽しかったのだと思います。

グノーブルのことを娘は、受験塾ではなく人間形成塾という感じでとらえていたのではないかと思います。私自身も、大学生になっても、社会に出て、そこで役立つような人としての底力をつけてくださったように感じています。先生方には大変感謝しております。



野田：うちの場合も、塾に行くのが大変とか授業が辛いとは、娘からは一度も聞いたことがありません。むしろ、「グノだけは休みたくない」と断言していました。

グノーブルからの帰りは、私が最寄りの駅まで迎えに行っていました。まずその日の添削の点数報告から始まりました。きっとそれが本人のメルクマールになっていたのでしょうね。家に着いても、延々とグノーブルでの出来事を話していました。ときには先生のものまねをしながら(笑)。学校でもグノーブルの話で盛り上がっていたらしく、グノーブルを心から楽しんでいました。

森：うちの娘もよく先生のものまねをしていました(笑)。それほど先生の影響は大きかったと思います。ひょっとしたら、ものまね上手だったので、英語が伸びたのかもしれませんが(笑)。

グノーブルのこと

近藤：受験を通して息子は大人になったと思います。私に特に親切にしてくれるようになったとか、そういうことではありませんが(笑)、普段の顔つきや考え方に感じられます。グノーブルの関わりがどの程度なのかはわかりませんが、数学も英語も、毎週あれだけ濃くて長い時間を過ごしてきたことの影響は少ないと思います。

受験生を持つ母親は大変だというイメージがありますが、私は家族の前で、「雅貴がこのまま合格できたら、私はすいぶん楽だった」と漏らしたのを覚えています。受験期を通じて本人がピリピリすることがなかったからです。むしろ、楽しそうに勉強している様子の方が印象に残っています。ピリピリしていれば八つ当たりされたりもするでしょうし、そんな時期がいつ訪れるかと身構えてもいました。でも、最後までそういうことがなく、とてもいい受験期だったと思います。もしこれが他の塾だったらどうだったでしょう……。もっと追いつめられていたかもしれません。そういう意味ではとても感謝しています。

森：やはりアウトプット力がついたことが、グノーブルで身に付いた中でも特に大きかったことです。もともと文章を書くのが好きな方でもなかったし、まして作文コンクールで入賞するような子でもなかった。国語力がないのではと思っていましたが、今の彼女が書く文章や発言内容から、親が思っていた以上に分析する力や表現する力が成長しているように感じます。英作文も、英文要約も、毎週、大量に添削して

いただき、授業の中でさまざまな知識や考え方を授けていただいていたので娘は成長していたのではないのでしょうか。

子どもたちが一人で学べることは限られると思います。そもそも娘はアクティブに動いて知識を得ようというタイプではないので、グノーブルの授業で見聞きしたことがまるで自分の体験のように感じていると思います。もちろんそれは疑似体験ですが、人に伝えられるほどになったことは大きなことで、この先、彼女の人生に必ず役立つ貴重な財産をグノーブルで授けていただいたと思っています。

もちろん受験力もしっかりつけていただいたので、慶應の経済学部を受験したときにも、難題とされる英作文のことを、「グノの英語をやっていたらチャラチャラと書けるよ」と、娘はこともなげに言っていました。

野田：うちの娘も先生方のことを本当に信頼していましたし、英語は学校とグノーブルだけで、他には何もやる必要はなかったようです。本番でも、十分な手応えがあったらしく、「楽勝だった。答えが書け過ぎちゃってどうしようと思った」などと話していましたが、私立の医学部を受けた時の小論文にも、グノーブルの英語は大いに役立ったようです。普段からさまざまなトピックを英文で扱っていただいていたし、その背景の話を先生が印象深くお話しくださったので、娘の中に、自分でも使える生きた知識が蓄積されていたのだと思います。英語そのものの力を伸ばすだけではなくて、英語を通して教養まで底上げしていただける授業がグノーブルにはあるのだと思います。

お子さんが受験を迎える方に

野田：グノーブルでの勉強をしっかりと復習しているのであれば安心して

いていいと思います。英語が少し伸び悩んでいるからといって、違う本を与えたりはしない方がいいです。実は、私は上の子のときにやってしまったのですが、結局、親もグノーブルのことを信頼して子供を託すことが力を伸ばす一番の近道です。親に言うことがあるとすれば、「グノーブルの復習をしっかりとやろう」に尽きます。それでも心配ならば、お子さんに先生に相談するようアドバイスをするのがいいと思います。本当に素晴らしい授業なので、親が心配し過ぎてあれこれ言わないことが大切です。



森：娘は大学に入学してからもグノーブルに通い続けたいと言っていますし、大人も通わせていただければいいかなと思います(笑)。そんな塾ですから、まずはグノーブルに通うことを楽しめたらいいのではないのでしょうか。

中には中学生のうちから東大とか医学部とかを見据えて勉強するお子さんもいらっしゃるでしょうが、娘の場合は、今やるべきことにいつも集中していたようです。最終的に志望校を決めたのも高3の夏休み以降でした。高い山に登ろうと最初から思ってしまうと気持ちまで辛くなってしまふこともあります。それよりも一步一步を固めていけば知らぬ間に自分が目指すべき山が見えてくると思います。

それは親の気持ちとしても同じで、

親が早いうちから自分の理想とする物差しを持ってしまうと、焦ったり悩んだりすることにもなります。親としては、受験だけにとらわれない長期的な視野を持ちながら、常に足元も見ながら、子供と一緒に中学・高校期を過ごす方がいいと思います。

あと、お友達との関係です。この年代の友達同士の影響は大きいと思います。大人の言うことには耳を傾けなくても友達には心を開きますし、勉強においても、大人の説明がわからなくても、友達同士で教え合うことで理解が進むこともよくあるようです。

近藤：子供をよく見るべきだと思います。もし私が、もっと早くと焦ってグノーブルに息子を入れていたら、今の結果にはなっていなかったかもしれません。いろいろなタイミングが合い、偶然の出会いもあって、それで息子のやる気にスイッチが入ったと思います。それは塾しかり、普段の生活しかりですが、そのあたりは一番近くにいる母親の得意分野でしょうから、しっかりと子供を見て、今に相応しい選択をしてあげるべきだと思います。

ただし、グノーブルと決めたのなら、親の方も最後まで託すべきです。先ほども申しましたが、息子は一番下のクラスからのスタートで、上位にはなかなか上がれませんでした。ある時私は、「あなたにとってグノーブルは難し過ぎるんじゃない？」と言ってしまったことがあるんです。そうしたら息子が、「グノには他の塾が合わなくて途中から入って来る人がいっぱいいる。他の塾に移っても戻ってきている人もいる。だから僕はグノで上がれなかったら、どこに行っても上がれないと思うからここで頑張る」と言ったのです。その時は本当に余計なことを言ったと反省しました。子供が頑張っているのなら、できる限りそれを見守ることが大事なことだと思います。

グノの授業は、先生と生徒のどちらもリーダー。信頼関係が基調となった双方向授業でした。

2015年春、2人のグノーブル卒業生が大学を卒業して新たな門出を迎えました。榎野平さん*(東京大学法学部卒)と、津川菜央さん(一橋大学法学部卒)。同じ法学部出身ながら、選択した道はそれぞれに違います。ただ2人に共通しているのは、グノーブルで学んだ日々への感謝と、東日本大震災に見舞われた年に大学に進学したことへの思い。そんな2人が、進路報告にグノーブルを訪ねてくれました。すっかり大人になった榎野さんと津川さんに、希望に満ちた門出を前にお話をうかがいました。(取材・文：吉村高廣)

*Gno-let vol.4 東大合格特集号にもご登場いただきました。

グノーブルを訪ねたわけ

津川：榎野くんとはグノで一緒にいた。2015年が明けて「あけおめメール」を交換したとき、そういえばグノが懐かしいねという話になり、卒業したら彼はロースクールで私は就

職なので、余裕がなくなる前にグノの先生方に挨拶に行こうということになったのです。入試が一段落した後なら先生方もお時間があるだろうということで一緒に訪ねることになりました。

榎野：本当はロースクールに合格し

たとき、ご報告したいと思っていたのですが機会を逃してしまい、でも必ず来ようとは思っていたので、今回はとても楽しみにしていました。

津川：そもそも私の中でグノは、単なる大学受験塾ではなかったのです。グノで受けた英語や国語の指導は、



榎野 平さん
東京大学法学部卒業
開成出身



津川 菜央さん
一橋大学法学部卒業
学芸大附属出身

私の中では物事を考える軸になっていますから、先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

榎野：僕の場合は法曹を目指しているので、大学進学後もずっと受験が続いている感覚です。ですから、法律の勉強をしているだけでもグノで先生に言われたことをよく思い出すのです。勉強に取り組む姿勢についてもですが、もっと具体的なことでグノで身につけたことをベースにしています。

グノでは、「英単語を日本語との対応で覚えてはいけません。英語を英語のまま処理！」と繰り返し言われていました。たとえば、「finger*=指」と覚えるのではなく、fingerのイメージをしっかり捉えるという指導でした。

法律用語も同じで、先入観で臨んでしまうと違った解釈をしてしまうことになります。たとえば、「会社は社員のものである」という表現も、法律用語上の解釈と一般的な解釈はまるで異なります。「社員」という言葉は、会社法では「株主」のことだからです。法律の勉強をしていて、グノで学んだ英語との向き合い方をよく思い出していましたし、実際に今もそれがとても役立っているのです。

*ロングマン現代英英辞典には、one of the four long thin parts on your hand, not including your thumb「あなたの手にある4本の長くて細い部分、親指は含まない」と定義されています。また、「足の指」はtoeでfingerではありません。

津川：私もグノの授業で身につけたことがとても役立ちました。法学部では論文を書く機会が多いのですが、難しい言葉を重ねて冗長な言い回しになりがちです。グノでは、毎回の英文要約で、エッセンスを抽出してシンプルにまとめる練習を徹底的に訓練しました。そのおかげで、簡潔で明快に表現する習慣が身についたと思っています。

それから、私の場合、方法論も持たずに、やみくもに頑張るところから受験勉強を始めていましたが、グノに通って、勉強がずいぶん上手に

なったと思います。法律を学ぶときには、憲法、民法、刑法、商法、民事訴訟法などたくさんあります。覚えることや理解することが多岐に渡るときには、戦略的なやり方や、俯瞰的な視点を持たなければとても間に合いません。グノでの勉強方法は、大学進学後にも実践的に役立つものでした。

これからの進路について

榎野：実は最初は医学部志望で、途中で文転しましたが、きっかけになったのは、その頃の日本を騒がせていた企業買収や合併、インサイダー取引に関わる事件などです。ITベンチャー企業の若手敏腕社長が法律問題で足元をすくわれたりしていました。

ところが当時の僕には、なぜ彼らは罪に問われるのか、法律的にどんな問題があるのか、まるでわかりませんでした。そこで、兄が持っていた証券取引法の教科書を読み始め、「この分野は面白い！」と思ったのです。

一般的に弁護士というと、個人の犯罪や離婚問題などで活躍するイメージが強いと思いますが、会社の株取引や企業買収の手助けも弁護士の仕事です。高度な専門性を必要とする仕事ですが、それだけに社会への貢献度も高いと思います。ですから、ゆくゆくは企業法務専門の弁護士になりたいと思っています。

津川：私が法学部を選んだのは、人が好きで、人に興味があったからでした。人と人との間にはどういう時に争いが起こるのか。またその争いに対してどんな解決策を社会は提示するのか。人のモラルと法にはどんな関係があるのか。そんなことを学びたくて法学部を選びました。

「交渉コンペティション」というゼミをとってからは、たくさんの企業法務担当者にお会いしてきました。ある担当者からは、「弁護士を目指すのもいいけれど、法律の知識を

持った企業人も大事だよ」と進路についてのアドバイスをいただきました。「一企業人としての感覚も持ちつつ、その上で法律的なことも知っている、バランスの良い判断ができる」と。もともと人に興味がある私の進む道が見えてきた気がして、それで大手損害保険会社に就職することにしました。

配属先についてはもちろん未定ですが、まずは会社に入っているいろいろな経験ができることを楽しみにしています。私は好奇心も冒険心も強い方なので、いずれは海外で働きたいという希望もあります。海外勤務のチャンスが多くある会社なので、希望が叶う可能性も高いかなと思っています。

高校時代と浪人時代

津川：学芸大附属は、文化祭や体育祭など行事が忙しい学校だったので、その合間に、わりと淡々と勉強していました。ところが、東大受験に失敗して浪人生活が始まった途端、勉強以外のことに傾きがちな自分の好奇心を抑えることが難しくなりました(笑)。その頃は世界史の資料集を見ることにハマってしまい、「受験が終わったらここを見に行きたい！」といったことばかり考えていました。

でも、そんな浪人時代に自分に気づけた感じがします。「大学受験のためだけではなく、もっと先の自分の未来のために勉強をしたい」と考えるようになりました。目先の目標だけにこだわって勉強していると、小さな結果に一喜一憂してしまいます。そうではなく、ひとつ先のものを見る習慣が身につきました。

榎野：僕の場合、医学部志望からの文転でしたから、現役時代は文系科目が遅れていて、何とか追いつこうと必死でした。

浪人の時の勉強は自分の穴探しばかりで、津川さんのように未来への希望に満ちてはいませんでした(笑)。

自分の悪いところばかりを探すという勉強のやり方だったので辛い浪人生活でした。

それで、高1から通っていて良さがわかっているグノに再び通い始めました。英語も数学も、グノの授業に出ると、時に打ちのめされますが(笑)、いつもいい刺激にあふれていました。面白い解説は聞けるし、自分についての思わぬ気づきもあるし、グノの環境からは元気も勇気もやる気もらっていました。

大学時代に経験したこと

榎野：大学生活の中で最も大きな出来事は、東大のオペラ団体*で指揮者をやったことです。中学・高校とオーケストラ部で、高校のときは指揮をやっていたので、大学でも指揮者を希望していました。普通、大学のオケはプロが指揮をしますが、東大のオペラ団体はすべてアマチュアの手でオペラを上演し、指揮も学生です。もしかするとチャンスが、と期待をしていましたが、予想より早く、2年の夏に初めて指揮者をやらせていただけました。

総合芸術と言われるオペラの指揮は予想以上に難しいものでした。楽器を指揮することには中高での経験からある程度の自信はありましたが、そこに歌が加わると求められる視野の広さはまるで違いました。イタリア語やフランス語など原語での歌詞の解釈にもかなりの努力が必要でしたし、歌の方に注意を奪われすぎて、楽器が疎かになっては全体の仕上がりは期待できません。大きなバランス感覚を学ぶという点でとても勉強になりました。

また、東大のオペラ団体は学生だけではなく社会人の方も多く参加しています。年齢も僕よりかなり上の方もいらっしゃいましたが、そこで指揮者が臆しているのは音楽がまとまりません。意見の闘いは日常茶飯事でしたし、僕が最年少ぐらいだったときは気苦勞が絶えませんでした

が、それでも何とかやれたと思います。本当にいい経験をさせてもらえました。

*正式名称は「東京大学歌劇団」。東大の学生はもちろん、他大生や大学院生、社会人も参加して、オペラを自主公演しています。

津川：私は一橋国際部*のディベートセクションに所属していました。ディベートは、「死刑制度」とか、「動物実験」などといったテーマをめぐっての賛成側と反対側の討論で、論理性や具体性などを競って勝敗がジャッジされる、スポーツのような競技です。

私がやっていたのはParliamentary debate**です。テーマが発表されるのは15分前で、即興で3対3のグループが試合形式のディベートをすべて英語で行います。海外の大会に参加すると、英語が公用語になっているシンガポールや香港、フィリピンなどが相手だったり、それこそ、ハーバードやオックスフォードのチームの前だったりすると、少ししたじろいでしまいました。

とはいえ、大切なのは英語の流暢さではなく内容です。テーマを明確に捉えているか、問題点を的確に分析できているか、解決策に具体性があるかなどに集中するようにしていました。うまく一貫性のある論理を組み立てられれば英語が達者な国の人たちにも勝てるのです。

「日本人はディベート下手」と言われることもあります。理由は2つあるように思います。1つは、日本語は結論を後伸ばしにできる分、考えながら話すことが可能という言語構造です。ディベートを行うという観点からすると、言語構造自体が向いていないように思います。2つめはメンタリティです。良いか悪いかは別にして、人に反論をしたらそれが人格否定ととられるのではという感情面の問題があるため、日本人は率直にものが言えません。

ところが欧米の人たちは、試合が終わって勝敗が決まった後でさえ、「こ

こを直せばもっと良くなるのに」とわざわざアドバイスする人が少なくありません。それを素直に聞き入れられるか否かで自分の成長も違ってくると思います。

* 一橋大学公認のESS。
** 英国議会をまねた形式のディベート。賛成側のGovernment(与党)と反対側Opposition(野党)に分かれて議論します。



榎野：僕が志している弁護士は、きわめてディベートに近いことを実務として行うわけですが、話し方や説得力という面だけでなく、理論の構築力という点が大切だと思います。

僕自身ずっと交渉学をやるゼミにいました。その経験から言うと、対立する当事者間でどれだけWin-Win*の状態をつくりだせるかを考えることが大切です。より高い利益を生み出せないかも考えなくてはなりません。たとえば、100の利益を50と50で分け合うだけでなく、200の利益を分け合える状況をつくれなかと考えるのです。また、公共性・社会性というものも考慮していけば、さらに大きな視点でのWin-Win状態を生み出せます。

*関係する両者ともにメリットのある「相手も勝ち、自分も勝ち」状態であること。

津川：ディベートにも似た面があります。私はディベートの審判を任せられる場合もあり、幸い審判として結

構高い評価をいただいていた。ただ単に勝ち負けの判断をするのではなく、判断の説明をするのも審判の役目です。明確な軸をもとにして客観性を持った説明を組み立て、さらには負けたチームが次の試合で活かせるものになるように心掛けていました。

その時に大事ななのは、言われる側の立場にたって話すことです。私自身、負けを宣言されて悔しいこともありましたが、そんな気持ちのときに、どう説明されれば納得できて、「よし、次につなげよう!」という気持ちになれるかを考えながら話を組み立てていました。

これは、これから関わるビジネスにも当てはまると思います。異なる価値観や立場の人たちと関わるのに大切な視点を学べたと思います。



リーダーシップとグノーブル

津川：集団が同じ目標に向かって進むには、リーダーの存在は欠かせません。「リーダーシップって何?」と問われたとき、私が考えるのは、求められる役割を察知し、それをすんなり果たせる力だと思います。リーダーに向いている人が他にもいる集団なら、あえて自分が先頭に立たなくてもいいと思っています。

たとえば、そのリーダーが事務的な仕事が苦手ならば、事務的な仕事を率先してやる側に私は回りたいと思います。広い視野で周りを見渡して、臨機応変に自分のやるべきことを見つけ出すことが、集団をまとめて前進させる上での鍵になると思います。つまりリーダーシップは、トップに立つ人だけが持つていけばいいものではないのだと思います。

私自身、中学時代は生徒会、高校時代も文化祭や体育祭などの行事で、いろいろな人間関係の中での自分の役割を考えてきました。大学4年間続けてきたESSのディベートセクションでも大会出場関連の要職に就いていました。そもそもこのセクション自体、私が入ったときにはまだ2年目ということもあり、「こうやるべき」という仕事のルールがなく、気づくことがあれば自分が積極的に動いていました。

また、一橋大が所属していたJPDU*では、他大学の先輩方にアドバイスをいただきながら運営に関わっていましたが**、こうした活動を通して、率先してやることの大事さ、リーダーではない人にもリーダーシップは必要だという考え方に行き着きました。

* Japan Parliamentary Debate Union(日本パラメンタリーディベート連盟)は、国内外の大会における意志決定や事務処理をする団体。
**津川さんはJPDUの2013年度は総務、2014年度は副代表をつとめました。

榎野：最初は自分の中で「やるぞ!」という気持ちがないとリーダーはつとまらないと思いますが、一度周りから認められる存在になった後は、自然に動けるようでないリーダーとは言えないと思います。カリスマ性でまとめていく権力的な手法ではなくて、自然に皆の支持を得て物事を進めていくのが、僕が考える理想のリーダーシップです。

指揮者をやっているときも、あまりうるさく言って皆をまとめるというよりは、むしろこちらからメンバー

に寄り添っていくように心がけていました。

これをグノの授業に置き換えて考えると面白いと思うのです。これから僕はロースクールに進むわけですが、ロースクールの特徴に、ソクラティックメソッド*と呼ばれる双方向授業があります。グノの授業はまさにそれです。生徒の反応次第では、授業がどこにいかかわからない。話が横道にそれていくかもしれないし、授業がどんどん延長するかもしれません(笑)。

グノの授業は決して先生だけではなく、生徒も対等な関係で授業が進んでいたのではないかと思います。だからこそ、僕はある責任を感じながら授業を受けていました。教室にいる一員として授業をつくり上げなくてはならないという思いがありましたし、常に主体性を持って授業に参加していました。

*講師が一方向的に講義をするのではなく、ソクラテスが弟子たちと問答したような対話型双方向授業。

津川：そもそもグノには「集団」という概念がないかもしれません。それは、「私と先生」という感じで、常に「1対1」の関係が築かれていて、その集合体が一つのクラスになっていたと思うのです。

先生も全体を見渡すことにウエイトを置いているのではなく、個人と向き合い、個人との関係を大切にされて授業を行います。人間同士の信頼が基調となっている関係を、在籍していた3年間を通じてどの先生とも築けたので、グノではいつも主体的になれたのだと思います。

グノーブルで学んだもの

榎野：物事に素直に向き合うことです。グノで学んだ英語へのアプローチはまさにそういうことでした。頭の中でいちいち日本語に置き換えたり、日本語の語順に直しながら解釈していくのではなく、英語のまま、英語の語順で処理していけば、話の

内容にまっすぐ向かえます。

法律用語に対するアプローチの仕方もそうですし、オペラをやっていた時も同じことが言えました。フランス語、イタリア語、ドイツ語で上演しましたが、音楽ですから歌詞は止まることなく流れていきます。その流れの上にさまざまな思いや感情が歌い上げられているのがオペラです。いちいち頭の中で日本語変換をしていたのではオペラは味わえませんし、指揮をすることもできません。

グノで教わった、「英語は英語のまま処理すればいい」という、こんなに単純なのに、他では教えてもらえなかったアプローチはずっと役立っています。

津川：グノで英語を学んで、私は最初の夢を一つ実現させたのです。ハリリー・ポッターを原書で読むということです。中学の時に辞書を使って読み始めたことがありましたが、あまりの難しさに打ちのめされました。グノに入って英語への取り組み方が変わって、辞書に頼らなくても原書が読めるようになりました。語源から英単語を教えてもらったので、語彙力も推測力も飛躍的に伸ばせたのです。

もっと大きなグノ効果は、「勉強って面白い」といつも思えるようになったことです。私が好奇心旺盛になったのもグノに3年間通い続けたことが一因になっていると思います。

グノは先生たち自身が好奇心でいっぱいです。英文の解説では、背景的な話が先生の口からあふれ出てきます。そもそもグノで扱う英文はどれも面白かったのですが、そういう英文を見つけてくる先生たちもすごいと思っていました。そういう姿を見ていて、何か新しいことに出会ったら、その背景や奥にあることを調べるというスタイルは自

分にも自然に身につきました。自分から調べにいくことには新たな発見や驚きが伴いますから、楽しいに決まっています。

グノで扱ったさまざまな英文からは、日本人とは異なる価値観やものの見方に触れる楽しさも学びました。大学での4年間、法律と同じくらいスペイン語の勉強に力を入れていましたが、スペイン語には、日本語とも英語とも異なる価値観やものの見方があることを学びました。



グノで学んだ英語の勉強方法を踏襲してスペイン語を学びましたが、再現可能で応用力のある勉強方法がグノで身についたことにも感謝しています。いろいろな意味で、こんなにいい塾はないと、今でも心から思っています(笑)。

将来に向けて思うこと

梶野：僕らが大学に入った年は、ちょうど東日本大震災があった年です。東大の合格発表が3月10日で、その翌日に震災が起こりました。それから4年になりますが、法律を考える時は被災者の方々の人権といったことをよく考えてきました。何とかして自分の知識を還元したいと思っていますが、今はまだ意識するだけに留まっています。将来は社会の力になれるように、さらに学び続けて自分を鍛えたいと思っています。

これからは、ロースクールの双向向授業の中で、どんどん自分が話す機会が増えていくでしょうし、専門

知識を踏まえて話すことは、人生の中でずっと続いていくと思います。そこで参考にしたいのが、グノの授業です。

グノの先生は本当にかっこよかったんです(笑)。英文の解説の中で面白い話を必ずしてくれました。今の僕にとっても有益な話ばかりでした。弁護士というと、知識中心で専門性の強い仕事というイメージが強いのですが、そんな中でも、余裕を持って面白い話ができるような大人になれるよう心がけていきます。

文章を書くにしても、専門用語だらけのものではなく、そこに知的なユーモアが含まれている文章が書ける、そんな法律家を目指したいと思います。

津川：これは就職試験の面接では話していないことですが、損害保険会社を選んだ一番の理由は、弱い立場の方を応援したいという気持ちです。実は、私の母は気仙沼出身で、私も生まれたのは気仙沼です。震災が起こったとき、母は自分の生まれ育った気仙沼の状況を見て動揺し、親戚の方たちも悲痛な思いにいたる中で、私自身は後期受験に備えていました。

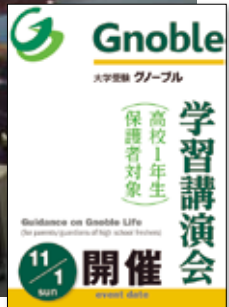
そうした背景もあって、私の気持ちの中には、弱い人の支援、被災者の支援という思いが少なからずあります。そのためには自分にもっと力が必要ですから、就職してからも意識的に勉強は続けようと思っています。

今日、高校時代に青春を費やした教室に久しぶりに来て、この机に座って、夢をふくらませながら勉強していた自分を思い出しました。やはり大人になるに連れて現実的になるのは仕方のないことだと思いますが、これからもいろいろなことに興味を持って、どんどん自分の世界を広げていきたいとあらためて感じました。



グノーブル主催 学習講演会 (高校1年生保護者対象) 開催!

11月1日、渋谷にある国際連合大学ウ・タント国際会議場において、高校1年生保護者対象「学習講演会 Guidance on Noble Life」が開催されました。午前・午後合わせて約400名に及ぶ保護者の方々が参加して、熱心に聞き入っていました。



学習講演会の冒頭は、グノーブル代表の中山先生より「知の力を活かせる人に」というテーマで講演があり、次に国語、数学、英語それぞれの科目担当者から「学習方法について」の話が続きしました。

中山先生から、2006年に発足以来「子供たちは社会のたからもの」という思いで教えることに取り組んできたこと、10年目を迎えた今でもその思いは変わりなく、時代や環境の変化に関わらず10代の生徒たちが身につける本当の学力を追求してきた塾の姿勢が伝わってきました。

「やるべきことを主体的にやる」ことが、大学受験の鍵だといいます。生徒たちが「知ること」「考えること」が大きな喜びを伴うことだと実感できれば、勉強に対して主体的に取り組むことができますようになります。グノーブルでは、いろいろな工夫を凝らした指導法で、生徒一人ひとりにまなざしを向けています。そこには映像による授業では味わうこ

とができない人間同士のつながりが生まれ、信頼関係が育まれていきます。先生が自分の名前を覚えてくれた、授業中に指名された、添削されたプリントに的確なアドバイスがあった、そういうことの積み重ねで生徒たちは主体的に前向きに勉強に取り組めるようになるのでしょう。

各科目の先生からは、それぞれ受講効果を上げるための勉強法や、大学入試で求められる力、これから受験までの過ごし方、というテーマのもと話が続きました。国語では、東京大学の入試問題(古文)に挑戦したり、英語では音声教材GSLの実際の音声を紹介する内容が盛り込まれました。保護者の中には自分自身の受験時代を思い出しながら、今の各大学が求めている力と子供たちが挑戦する入試への思いを新たにしたことでしょう。

先生方の話に共通していたのは、「学校行事や部活動に積極的に参加しながら、授業にも休まずに出席してほし

い」ということでした。部活にも塾にも、本気になって取り組もうというのです。1回の授業を休んだ分を後から取り返すのはたいへんなことです。でも考えてみましょう、どちらも自分でやろうと決めたことなのですから。

生徒たちは両立できるように工夫します。限られた時間を有効に使えるように苦心するでしょうが、その経験がとても大切なのです。学校行事や部活で頑張っていることは、受験にもつながるとともに、ひとりの人間として大きな成長を遂げることになるでしょう。そこで得られる達成感は何事にも代え難いものなのです。「さあ次は受験だ」とギアチェンジして取り組めるのではないのでしょうか。

卒業生からいただいた「グノーブルの先生は近い」というコメントを誇りに、私たちはこれからもコーチ役として生徒に伴走していきます。グノーブルの、そんな強い決意が伝わる講演会となりました。

※当日欠席された高1保護者の方、内部生の方は、本講演会の模様を GnoTube(<http://www.gno-ble.com/gt/>)にてご視聴いただけます。なお、ご視聴の際にはパスワード(GGLfpgH1)が必要となります。



中山伸幸先生(グノーブル代表、英語担当)



吉田裕子先生(国語科)



渡辺邦浩先生(数学科)



渡辺裕一先生(英語科)

◎ 国語講師座談会

兵頭 徹治 (右上)
山下 倫央 (左)
大林 和弘 (右下)

一貫性のある 「授業×教材×テスト」で 生徒たちに「気づき」の 喜びを与える！

算数ばかりに目が向きがちな中学入試ですが、国語は試験時間・配点とも算数と同じ学校が大半であり、受験においては重要な科目です。グノーブルでは生徒たちの国語の力をどのように伸ばそうと指導しているのか、その理念や授業の特色などについて先生方からお話を聞きました。

中学受験の国語について

兵頭：入試で出題される読解問題の文章には大きく分けて二つの柱があります。ひとつは物語文、もうひとつは説明文や論説文・随筆文です。また出題の形式には、記号タイプ・抜き出しタイプ・記述タイプの3種類があります。記述タイプを全く出さない学校は少なく、年々表現する力が求められるようになっていきます。

たとえば、今春の入試問題では、記号・抜き出しタイプだった学校が記述タイプの問題を出題したり、記述問題においても今までは制限字数内の解答を求めているものが、一行空欄の解答欄となり字数制限がなくなるなどの変化が見られました。記述問題を増やしたり、制限字数をなくしたりすることは、解く技術、書く技術よりも、

文章の本質的な理解を重視するという中学校側の意図を感じます。

山下：入室説明会でもお話していますが、保護者の方々が受験された頃と比べて、今の入試がどのように変化しているのかを知っていただきたいと思います。昔に比べて近年の問題は、語句・知識事項の比重がかなり下がったという点と、文章が大変長くなったという点が特徴としてあげられます。

つまり今の中学受験は、長文を主体にしてその内容理解や自分で説明する力を見る問題に比重が移っていると言えるでしょう。細かな知識ではなく普通の日本語の文章をしっかり読んで、その内容を読解し表現する力が求められています。

大林：細かいことを問う問題というよりは、この文章で何が言いたいのか、読み手の全体的な理解を記述で答え

させる傾向の問題が多くなっていると思います。

兵頭：国語で必要な力を一本の「木」にたとえて話をすることがあります。「木」は花や葉に目が向きがちですが、その元に枝があり、幹があります。そして、目には見えませんが土の中には根があるのです。入試では正解するための技術が重視されがちですが、それ以前に設問の理解、文章の構造の理解があり、さらに文章理解の背後には国語的常識やさまざまな言葉の実感というものがあるのです。「根っこの部分にどれだけ蓄積がありますか」「幹の部分がしっかりしたものになっていますか」が問われることが多くなっており、その部分が中学受験の国語で大きな差がつくところ。目につきやすい技術的なところでは大きな差はつきません。

子どもたちを取り巻く 環境の変化

兵頭：先ほどの入試における出題傾向の変化の背景には、子どもたちの生活自体が大きく変わってきたことがあるのではないかと思います。今の子どもたちは豊かな言語環境にふれる機会が少なくなってきたのではないのでしょうか。

山下：たしかに核家族化の影響は感じます。たとえば子どもたちが祖父母から戦争の話聞いて、戦争の悲惨さや食糧難のつらさ・ひもじさを肌で感じるような機会は、単に時代の流れということ以上に少なくなっていると思います。

大林：少子化の影響もあります。兄弟・姉妹など同じ家の中で暮らしていても異なる価値観を持っている存在と日々接することは多様な価値観を許容する土壌となるでしょう。

年齢や性別が違えば言語レベルも違うので、そのような環境に身を置くことで自然と語彙も増えていった面もあると思います。

兵頭：少子化によってそういう機会も少なくなりました。こうした家庭環境の変化に加えて、社会全体も変わってきていると思います。子どもが少なくなっている影響からか、子どもはとても大切にされています。もちろん、安全であったり、個性が認められたりすることは望ましいことです。

その一方で、子どもが行うことが「ここからここまで」というような形で厳しく制限されることが多くなっているように感じます。

山下：それは私も感じています。ある種の分業化というか、子ども扱いをしすぎることで、成長の機会を奪っている面があり、それは言語面にも及んでいます。

大林：運動会の徒競走でみんないっしょにゴールするというのがかつて話題にのぼりましたが、そのように子どもだから競争は必要ないと決めつけて、差をなくそうとしすぎてしまう風

潮は子どもたち全体の成長の歩幅を小さくしてしまうように思います。

山下：国語・言葉という分野においては、背伸びをさせることが、子どもの成長を促すと思います。たとえば読書でも、今の精神年齢にちょうどいいものを与えるのは悪いことではありませんが、未知の事柄に出会うことで生じる苦労や気づきは得られません。

「お前ならこの本が読めるはずだ、読んでみる」と言い切れる大人の存在が減少したとも言えますね。

大林：大人が合理的・効率的な尺度だけで子どもたちに接することは必ずしも良いことではないのでしょうか。

必要だからやらせるというスタンスだけではなく、講師などの大人が子どもたちと何気ない会話を重ね、多様な話題に触れさせることにも価値があると考えています。

兵頭：中学受験の入試問題やグノーブルの国語で扱う文章は、その学年の子どもたちにとって決して読みやすいものばかりではありません。ある意味グノーブルの国語の授業は背伸びをする機会だといえます。中学入試に向けた学習を通して、言語的にも豊かな成長をとげてくれることを願っています。

「国語力」とは何か

兵頭：「国語力」というのは、先ほどの「木」のたとえで言えば、「木」の全体を指してそう呼んでいると思います。語彙力であったり、読解力であったり、記述表現力であったり、そういうものの総体を「国語力」と呼んでいるのです。

だから、うちの子は「国語力」がないと不安になっても、それをまるごと解消するのは困難です。「国語力」とは、読解の力や知識などが全部つながった総体なのです。

しかし、いちばん目につく「花」とか「葉」の部分に○や×がつくので、保護者の方々がご覧になると、記述が書けない、記号問題が苦手、つまり「国語力」がない、という話になるわけです。

読解問題を解く際に大切なことは、

まず「問い」を理解しているか、次に「前後の文脈を理解しているか」さらには「文章全体の中での意味がつかめているか」とさかのぼって考えることです。さらに言えば、その文章の背景について実感が伴うイメージをつかめているか、ということがあります。ですから、その中のどこかがうまくいっていないと、結果としてテストで好ましくない得点として反映されますが、それを単に「国語力」がないと断ずるのは無意味だと考えます。

山下：私も「国語力」という単語は使いません。

たとえば、先月のテストで高い偏差値だったのに、今月のテストでは偏差値が下がったとします。よく見てみると出題分野が違って、今月はその生徒にとって得点を取りにくい領域が出題されていただけだったりします。知識問題が得意だったら、知識問題の比重が減れば単純に得点も下がりますよね。またその逆のこともあるわけ。

点数だけを見て「国語力」が落ちた、学力が落ちたと言う方がいますが、実は異なる側面を問われたので違う評価が出たにすぎないのです。生徒の「国語力」があるかないかを真剣に考えるならば、一つひとつの分野での力を把握して、このテストはこんな配合で問われたからこういう点が取れたと言わなくてはならないのです。一概に「国語力」という言葉は使えないのではないかと思います。

大林：「国語力」とは何かと問われたならば、中学入試で求められる国語の力であり、それは基本的には「自分以外の人が言っていることを、筋道立てて読み取る力」だと思っています。

私は読解力があるのに記述力がない生徒はいないと思います。記述問題が書けないというのは、何を問われているのかわからない、筋道立てて理解できないなど、いろいろな理由があると思います。書けないことの原因は、文章の内容や相手の言っていることをきちんと把握していないからです。

兵頭：問題を解いているときに、なかなか文章では表現できないという生徒もいます。その大きな要因のひとつは、設問の意味がつかめていないということです。同じ問題を授業中に教師が口頭で問うと、かみ砕いたシンプルな問いになるため、多くの生徒がきちんと解答できます。

山下：たしかに生徒が書けない問題があって困っているときに「じゃあ今から設問文を音読する」と言って読み上げると、「あっ!」と言って書き出すという現象がけっこうあるのです。子どもは目から得る情報を大人ほど上手にとりこめないで、耳から音で入ってくる方がわかりやすいのでしょう。声に出すだけでわかるということはありますし、つまずきがちな生徒、また低学年の家庭学習では声に出してみることは大切なことだと思っています。

子どもたちが経験していない事柄を感じてもらう

兵頭：一概には言えませんが、現在の子どもたちにとって根っこの部分となるべき国語的な意味における常識や語彙に伴う実感がかなり薄くなっていると思います。たとえば「せつない」という言葉が、どういうときに使われて、どういう前後の文脈からそういう感情になるのかということに対する感覚は薄れていると言えます。ですから、「親心」とか「貧しさ」など実感することが難しい事柄については、授業の中で解説や説明に割く時間を意識的に多くしています。

大林：生徒を見ていると、「日常生活の中でいろいろな経験ができていないのでは?」と思うことがあります。生徒自身はとても忙しく過ごしています。それが逆にさまざまな経験を能動的にする機会を奪ってしまい、それゆえ人の気持ちを慮る機会が奪われているのかもしれないと思います。

兵頭：生徒が自分ひとりで文章を読み解いて、なるほどと実感するのは難しいことも多いと思います。あるときに、戦時中が舞台となっている物語文で

「ひもじい」という言葉が出てきました。「ひもじいという言葉聞いたことある?」から始まって、よくわからないという生徒が多いので、戦争中は白米などなかなか食べられなかったというような話を、身ぶり手ぶりを交えたり、絵を描いたりしながら伝えていきます。

その中で「ひもじいってそういうことか」とある程度わかってもらって、後の授業で「あのテキストで、ひもじいって出てきたじゃない」というつながりで結びつけていきます。このように先生や友達言葉に耳を傾け、自ら考える積み重ねのなかで、それまで知らなかった言葉がだんだんとふくらみを持ち、言葉に対する実感が伴っていくのです。

山下：先ほどの根っこの話ですけれども、かつての常識が常識でなくなっているというのはたいへん大きな問題なので、授業中の読解時間を多めに設定しています。読解問題をたくさん解いているのではなく、文章の時代背景について生徒とよく話をします。文章に出てくる事柄を、授業中に追体験してもらうための工夫です。生徒たちは具体例がないと頭に入っていきません。**大林**：以前、授業中に「サザエさん」の話をしたことがあるのですが、「サザエさん」を見たことがないという生徒がいてけっこう困りました(笑)。家族構成から説明しながら進めたのですが、授業中のそういう会話こそが大事なのだと思います。



兵頭：問題文の著者の世代と生徒たちでは当然生きた時代や生き方が違うので、そのままスムーズに文章に入り

込めることは少ないのです。説明的文章で「生き方が多様になった」という話題が出てくることがありますが、逆に言えば昔は「これは常識だよな」で通じたことが多かったのです。たとえば少年だったら野球をしているとか、そのころの子どもにとっては、たしかに野球のルールなど常識でしたよね。異なる時代や社会それぞれに「常識」があることの理解は小学生にとってとても重要です。

中学受験グノーブルの国語の特徴とは

兵頭：授業では、読解の時間にかなりの比重を置いています。時間をかけることにより設問や文章に、文章の中でもさらに文章の構造にまでさかのぼって理解を深めることができます。すると文章を論理的、構造的に読んでそれを相手に伝えられるというところに目が向いて、さらに土台になっている常識や言葉の実感という部分にたどり着けるものだと考えています。

この過程に対して多くの時間を割けることはとても有意義なことです。結局ここに時間を割かないで授業を終わらせてしまうと、国語の授業としては成立するものの、生徒たちが授業を通して得るはずの文章構造の理解や言葉に対する実感、国語への親しみなどが得られなくなってしまいます。この根っこの部分に時間を割くというのが、読解に時間を割く意義だと思いますし、グノーブルの国語の特徴だと思います。

山下：大手の進学塾の中には、国語の授業を二人の教師が知識分野と読解分野のそれぞれを担当し、読解と知識の時間が半々で区切られている場合があります。

グノーブルでは半々に区切らず、講師の裁量や工夫でいかようにも可変的にできるシステムです。これにはとても大きなメリットがあります。先ほどのお話にもありましたが、時間がないとあらずじ確認だけで終わるけれども、時間があれば文章の背景や事情、人々の考え方にまで踏み込めるので授業

の幅が大きく広がります。結果として、今の入試問題の傾向にマッチングした指導ができるようになります。読解問題の比重がとても大きい現状で、読解と知識の時間を半々に区切る必要はどこにもないと考えています。

大林：ただ文章を読んで記述して、ということではなくて、文章に付随することや一見関係がないことでも生徒と対話することで、話題が大きくふくらんでいきます。そういう授業を今のグノーブルでは展開しているのです。もちろん誰でも簡単にできる授業ではありませんので、どの先生も準備に多くの時間をかけ、万全を期して授業に臨んでいます。

兵頭：生徒とああでもないこうでもない会話することは本当に大事なだと思います。自分の経験で言えば、読解の時間に制約があるとしても急ぎ足になってしまい、生徒に十分伝えることができなかったという思いに駆られることが多くありました。

生徒と対話することでよい関係が構築できれば、いろいろな意見が出てきたり、それによってさらに議論が発展したり、さらには生徒それぞれの個性がつかめて、お互いがより打ち解けられ、密度の濃い時間を過ごすことができると実感しています。

また授業中に添削が行われないということはありません。少人数ということもあり、生徒個々に添削する場合も待ち時間が少ないですし、クラス全員の意見を聞いても授業の展開に支障がありません。きめ細かく指導するうえで、私たちにとっても、生徒たちにとっても望ましい環境だと思います。

授業で大事にしていることは、今日の前に生徒たちがいるのですから、彼らの表情や様子を見て自分が何を話すべきかを感じる、ということです。目の前にいる生徒たちが必要としていることを話したい、そう強く思って授業をしています。その場で添削することは、生徒たちにとっては記憶が新しいうちにポイントを指摘されることで理解が深まり、講師にとってはその

生徒たちが今必要としていることを感じる大きな手がかりにもなります。何を理解できていなくて、どんなことを話せばよいのかを判断する大きな手助けとなるのです。

授業、教材、テストのつながり

山下：教材に採用する文章は、生徒たちの知的好奇心を満足させる、読んで面白い文章であるということが大切です。面白くないと生徒たちがあれこれ考えて意見を言う気力がなくなってしまい、授業が沈滞します。逆に面白い文章であれば、その文章を媒介として、先生と生徒や生徒同士のやりとりが活性化し、さらに家に帰ってまで話しくなります。いくつもの「気づき」が期待できる、知的好奇心を大いにくすぐるような文章を教材へ採り入れています。

兵頭：とにかく良質で面白いもの、強いて言えば時代の中で生き抜いてきた文章を毎回のオリジナル教材に採り入れています。学年に関わらず、基準はひとつ、「面白い文章」です。



大林：最近の文章も積極的に採用しつつ、欠かせない名作など古い時代の文章も入っていますので、とてもバランスがとれている教材だと自負しています。

兵頭：作問については、問題数を増やすことに重きを置くのではなく、問うべきことを問う、文章の展開や流れを踏まえて、それぞれのポイントとなる箇所楔を打ち込むような作問を心掛けています。

それぞれの文章には、ここでこれを

聞きたい、次にこれ、そしてこれというようにはずせない問いがあるのです。そして、それらをきちんと確認することは、同時に文章を構造的につかんでいくことにもなるのです。

山下：塾内の月例テスト問題では、意識して記述問題を多く採り入れていません。授業での成果が的確に判断できなければテストを実施する意味がありません。グノーブルの国語は授業、教材、テストの三つが一体となった指導体系になっており、生徒にとって学びやすく、国語の力を大きく伸ばせるシステムになっていると思います。

家庭学習はどのように進めればよいのか

山下：家庭では難しいことをする必要はありません。教材の話にあった「面白い」というのは、ただ笑ってしまうということではなく、学ぶべきものがあるという意味です。授業という場で先生やみんなと対話することを通して、「なるほど、そういうことか」「ああ、そうだったのか」というように、さらにその理解が二、三步上がっていけるような文章を教材として選んでいます。それは講師がいらない限りはおそらくたどり着けない場所なので、そういう学習は授業で行うべきです。

他方、ご家庭で大切なのは授業で勉強したことを思い出すことだと思います。もう一回「先生はこんなことを言っていた」「僕はこんな意見を言った」ということを反芻しながら、最後のページまで読んでもらえば、それでほとんど復習は済んでいると考えます。

さらに理想を言えば、反芻すること・したことをお子さまが親御さんに話すことです。親御さんはそれをしっかり受け止めてあげればよいのです。これは学んだことを復習する・整理する・表現することになり、非常に効果的な学習法と言えます。

兵頭：家庭では漢字や語句など自分で確実にできることに留めて、読解についてどうしても教えたいという保護者の方には、厳密さを求めすぎない

ようアドバイスをしています。「お子様が書いたものを読んで、よく書けていると思ったら〇にしてください」と言ったことがあります。読解力は授業で身につけるべきものというのが原則です。

また、家庭学習の時間は科目によるバランスが大切だと思うので、得手不得手や教科によって家庭学習の時間が異なるのは当然だと思います。

山下：授業でやった問題を家で解き直すことをあまり強く言っているはいません。国語そのものが好きになるような家庭学習が大切だと考えています。生徒たちは授業で目いっぱい脳に汗をかいて読み、考え、表現することに夢中になって取り組んでいます。その姿勢がある限り、文章読解において家庭学習に大きく依存する意味はないと考えています。

大林：私も「授業で先生が言っていたことを、ノートを見て思い出すように」ということを言っています。受験学年では問題処理の練習をするという意味で、短い文章でパッと解くというような練習を勧めることがあります。

兵頭：決して国語の家庭学習を否定しているわけではありませんので、注意していただきたいと思います。その一方で、長年指導している経験から、家庭で学習した痕跡を残すこと自体が目的化してしまった「家庭学習のための家庭学習」も数多く目にしてきました。

家庭学習については、お子さまの各科目の学習状況を踏まえて適切なアドバイスをいたしますので、気軽に講師へご相談いただければと思います。

理想の授業とは

山下：「もう終わりのな？」という授業をしたいです。また、とにかく生徒たちに文章を読んで感動してもらいたいと思います。初めは感動がなくても、最後の5分間で「もう一回1ページの〇行目を見てみようか」と言ったときに生徒たちが「あっ!」と気づくことがあるんです。「そういう意味だったのか」と。すると私が何も話さなくても生徒たちの表情が変わります。顔にパッパッパッ

と灯がともる感じです。じっくり読むとすごく面白い、じっくり読むとあとで感動する、そんな経験を毎回積み重ねてもらえたらよいと考えています。

大林：繰り返しになりますが、文章の内容と一見関係がないことでも、後々身になることがたくさんありますから、雑談のような内容であっても楽しく話しつつ、お互いに会話を楽しみながら授業を進めることを心掛けています。

兵頭：先ほどもありましたが生徒の「気づき」はとても大事です。講師は教えることよりも、生徒に何とか気づかせる、ここまで話せば気づけるのではないかなというところを伝えるのが大事だと思います。

なかなか気づいてもらえないこともあります。全部説明してしまうと台無しになるので、いかに説明しないで気づかせるのか、ぎりぎりのところまで触れるのです。それができたときは「授業がうまくいった」という感じがします。



山下：こちらがうまくお膳立てをして、少し階段を昇りやすくしてあげたりはしますが、最後の一段は生徒本人が「こういうことか」と自分の力で書けるようにしています。最後の一段を生徒自身で昇りきらないと「教え込まれた形」になってしまいます。自発性や能動性がないと活かせる知識にはならないので、最後は子どもが自力でたどり着いたという感じで終わらせたいと常々思っています。

国語のセンスと読書について

山下：よく国語の苦手なお子さまを持

つお母さまから「国語のセンスがない」という話を聞くことがあります。「国語のセンス」とは、言い換えると言語の経験値だと思います。言語経験が豊かな生徒は、ひとつの言葉からでもいろいろなイメージが湧いてきます。言語経験が乏しい場合、まず「聞いたことない」とか「わからない」というところで止まってしまうのです。その差は俗にいう精神年齢が関係しているのかもしれない。

男の子でまだ幼いと思われる生徒でも、6年生の秋口になると急に大人びた発想をするようになるケースをたくさん見てきました。少なくとも中学受験に求められている精神年齢というのは、授業を集中して受けて、問題にきちんと向き合う努力をすることで最終的には追いついてくるという印象があります。

大林：国語に限らず何事にも「センス」はあると思いますが、それが大部分を占めているわけではなく、勉強においては訓練によって培うものの方が、割合として高いのではないのでしょうか。それは年齢が解決する部分もあります。しかし、「こういう文章だったら、結局こうなるに決まっている」というような当然の筋道が、まだわからない子どもにはまわりの大人が教えてあげるほかないと思います。それによって国語の力を上げていくことは十分に可能です。

山下：付け加えますと、子どもの言葉の力というのは「輸入」するしかないと考えています。自分の中で言葉が勝手に生産されて増えていくことはありません。ではどこから「輸入」するかと言ったら、自分より言語豊かなところから「輸入」するしかないと考えています。自分より言語豊かなところは大人しかない。そうすると「センスがある」=「言語感覚が優れている」=「大人との言語のつながりが豊かだった子」と言えるのではないのでしょうか。

大人というのは「本の筆者」でもよいわけです。文章の筆者である大人との対話か、実際会話できる大人との

対話か、いずれかのルートから言葉をたくさん「輸入」すると言葉が豊かになって、そのことを「センス」と言っているだけのことだと思います。

だとすると授業の本質はそこにあるのではないと思うわけです。問題の解き方を教えるというよりは、こういう考え方もあるとかこういう言い回しがあるとか、たとえば「友情」について熱く語り、大人社会では自分が損をしても友達の名誉を守るような人間を「人情に厚い」というんだみたいな話、いろいろな話をしながらいろいろな言葉を送り届けて、それが積もっていくとそれはいつか「センス」と呼ばれるものになるのです。

とにかく授業に出席する、そして講師の話を聞き、自分の思ったことを言ったり書いたりして成長することでしか国語のセンスを上げる方法はないと思います。

兵頭：読書の影響は大きいと思います。読書というのは前後の文脈が必ず存在するので、言葉を身につけるには格好なんです。前後の文脈のない「語彙集」のようなもので覚えていくのは、言葉を生きたものとして身につける上では非常にもろいのです。読書の経験の中から言葉を蓄えていくと実感が伴ってくるので質の良い言語の経験値が得られると思います。

大林：読書するには自分の興味のあるものばかり読むのではなく、いろいろなジャンルのものをまんべんなく読むことを心掛ける必要があると思います。

山下：私は好きな本を好きなだけ読ませてでも構わないと思います(笑)。いずれ飽きる時期が来ますから。それで飽きたらもっと難しいものはないのかと、さまよい出てくればよいのです。

塾というのはその子に興味のないことや出会うはずのなかったものにも、突発的に出会える場所だと思います。ひとりだったら読む気になれないけれども、先生がいて授業するからこそ読んで何かを感じることが出来ます。読書は読書で大きな価値がありますが、授業では、ひとりではちょっと踏み込

めない道を提示し、一緒に歩いてあげることで補完していく。これは特に読書離れが進む現代では、とても大切なことなのです。

兵頭：先ほどの「木」のたとえ話になりますが、根の部分の部分を耕すために読書というのはとても有用だと思います。しかしながら幹の部分、つまり文章を構造的に理解する、文章を構造的につかんだ上でテーマを推し量る力についていうと、必ずしも読書が役立つということではないかもしれません。きちんと筋道立てて読む、文章の構造を論理的に、客観的に把握していくことだと、授業を通して理解していくことだと思います。

山下：5年生までは、言語経験を耕すために読書をしていろいろな言葉に出会って、さまざまな筆者の世界観に触れることは大切だと思います。

「読書をしているのに点が伸びない」という話が出るのはおそらく6年生になって模試をたくさん受けて、その結果の偏差値が毎月出てくる時期ではないでしょうか。その時期になると読書はその子にとっての息抜きであって、塾や学校での勉強の行き帰りぐらいいは好きな本を読んでリフレッシュするという役割のものになっていくのかなと思います。

したがって、6年生にとって受験を意識して、点数を確実にあげていきたいという時期で、そのために読書をするというのは成り立たない話かと思っています。

2016年、小3の国語を開講

山下：来年度より小3の国語を新たに開講しますが、小3の国語でも目指しているものは同じです。ただし、あえて違いを言いますと、この時期のお子さまはまだ問題文をすらすら読み、自ら設問を解くということではできません。しかしひとりでは読めないような長い文章でも、私達と一緒にならば読み進めることができます。グノーブルでは生徒一人ひとりにまなざしを向け、その

「気づき」を大切にします。そして生徒自身が疑問を持ちつつ読み進める姿勢を身につける指導を心掛けていきます。講師の方で合いの手を入れて「ここで雲が出てきたね、何でだろうか」「太陽がかげっているね、気になるね」というようなことを、適当なタイミングで言うことで興味深く一緒に読んでいく、そんな姿勢を重視していくつもりです。活字にふれて考えるという部分をいちばん活かせるような文章と教材の体系になっています。

教材の特徴ですが、高学年と比較すると自由度の高い問題がより多く、問題の数は少なくなります。自由度の高い問題、たとえば「このあとに続く主人公のセリフを自分で書いてみましょう」「主人公と同じような経験をしたことがあったら、それを紹介してください」など、かたちに囚われず内容を実感し、実感できる範囲で書く力を引き出すような作りを工夫しています。



兵頭：4年生と大きくは変わらないものの、授業中の会話・対話の重要性はより高まると思います。生徒を子ども扱いせずに生徒の興味と意識の階段を一段上へと引き上げていくような授業を行っていきます。

大林：題材に面白いものをという話がありましたが、3年生の場合はそれよりもいっそう強くなるのではないのでしょうか。文章を読むということ、読むだけでなく自分で考えて発言することが楽しく興味深いことなのだ、そう感じてもらうことがこの時期の生徒の国語の力を伸ばす上で最も重要なことだと思います。

渋谷教育学園幕張中学校・高等学校

渋谷から世界へ、 卒業生と先生が語る その魅力！



渋谷幕張中学・高校の魅力について、渋谷中高と大学受験グノーブルの卒業生でもあり、現在、東京大学文科Ⅲ類1年生の草田里美さん、草田さんの入学以来6年間、学年担当、特に高校3年ではクラス担任をされた望月優里先生、入試対策室の永井久昭室長の3名にお話をうかがいました。



永井 久昭 室長 (右) 望月 優里 先生 (左) 草田 里美 さん (中央)

くれたことがありました。
草田：同じ学校で学んだ先輩からお話をうかがえたので、やはりすごく印象が違いました。帰国生だけではなく、自分でも行けるんだと感

浪人は20人程度しかいません。
草田：女子でも国立を目指す男子と混じって最後まで切磋琢磨できるので、ますます頑張れます。
永井：男子校は同性ばかりでのびのびしている反面、入学後しばらくの間は幼さが出てしまうこともあるようです。渋谷の場合は異性の目があるからなのかもしれませんが、中1であっても幼い行動というのはあまり見受けられないように思います。

望月：例えば中学生の頃は、合唱祭などの校内行事では女子の方が男子を引っ張り、男子も頑張らざるをえないようなことが多いです。ところが、高3になると男子の「第一志望は決してゆずらない」という強い姿勢を見て、女子もそれに刺激されて頑張る。このように男子と女子の発達段階に応じて、お互いに補完しあいながら、いい結果につながるのが共学校の強みだと思います。

東大受験とグノーブルについて

草田：東大を目指すようになったのは高校に入ってからです。2人の兄が受験している姿を見て、自分もそろそろやらなくちゃって思うようになりました。それでも最初は東大に対する気持ちは、あくまでも憧れだったのですが、クラスメイトの様子などを通してそれがどんどん現実の目標になっていきました。

望月：受験勉強を応援する対策としては、教科的な面では普段の授業に加えて、夏季に講習を70講座程度開

講しています。また、進路面談を通して受験期間の精神的なケアや個人的な関係を大切にしています。
草田：私は勉強を続けているうちに、英語の長文を読む力をもっとつけたいと思い、高2の時にグノーブルの体験授業に行きました。それがとても充実した授業だったので通塾を決めました。学校が終わってから塾の授業が始まるまであまり時間がなかったり、復習もきちんとなしといけなかったりと大変なことも多かったのですが、テンポの速い充実した内容は毎回楽しみでした。その後、数学や東大国語についても受講させていただきました。
永井：ダブルスクールというのは本当に大変ですね。アンケートによると、単科講習を含め一度でも塾に通ったことのある渋谷の生徒の割合は、高校1年生で17%、2年生で40%、3年生で60%未満です。この数字は、他の進学校にくらべて相当少ないようです。

東大1年生の学び

草田：東大に入学して最初の春学期では認知科学の授業がとても楽しかったです。秋学期は、教育に興味を持っていますので、現代教育論を楽しみにしています。将来、もともと興味のあった法学系に進むかどうかは自分でもまだわかりません。でもそこが東大の魅力でもあるんです。その分野のプロフェッショナルの方の話を聞いた上で、自分が何になりたいかを考えることができます。その点では教育や教養もしっかり学べることができる文Ⅲに入ってよかったなと思います。このメリットを最大限活用しようと思います。

永井：大学の中で真の目標を見つけられるというのは東大の魅力ですね。

草田：あと、私は高校のとき、人間の感情についても興味があり、「涙」をテーマに「自調自考論文」を書きました。当時、東大の生協で参考文献を購入したのですが、東大に入学した後その本を執筆した教授の授業を受けることになり、感慨深かったです。

望月：「自調自考論文」というのは、渋谷の教育目標である「自調自考」の集大成として高校1年～2年の2年間かけて書く論文です。高校時代に真剣に考え抜いたことが、東大に学ぶ今とつながったということですね。

中学受験について

草田：中学受験の頃を思い返してみると、当時はまだ幼かったのか勉強を苦痛に思うようなことはまったくありませんでした。みんなと授業を受けるのが楽しくて、長時間机に向かっても平気でした。ただし、渋谷の入試問題は当時から記述が多くて、とても難しかったです。

当時、算数は得意だったのですが、大学受験の数学は苦勞しました。反面、社会科の知識はその頃覚えたものが一番根本になったので、その頃にきちんとやっておいてよかったなと思います。特に日本史ですね。中学受験の学習が大学受験の基礎になったし、そこで好きになったからこそ文系を選んだきっかけにもなりました。
望月：渋谷の入試問題で記述を重視するのは、「自分で考えることができる」ことを大切にしているからです。国語科ですと、基礎的な語彙力を身につけるための漢字や知識から始まり、たくさん文学的文章を読んでさまざまなものに興味・関心を持っているか、そういうところを重視しています。他の教科でも同じように、日常の経験の中で考える力を育ててほしいですね。

永井：考える力が問われる入試問題に対応するためには、まずいろいろなことに興味を持つということが本当に大切ですね。単に勉強して知識を増やすだけではなく、家でのお手伝いなどの日常の経験から学べる事柄も重要です。

例えば、真水と濃い食塩水の入ったコップがあって、それを見分けるとい

みるという解答があるでしょう。

しかし生活の中から答えを出すこともできます。塩分の強い温泉に行った経験のある子は、石鹼が泡立たなかったことを思い出して、石鹼を溶かしてみるなどの解答を書くかもしれません。こういうのは光る解答ですね。

ぜひ本番の入試ではいろいろ頭を働かせて解答してほしいと思います。

< 2016年度の中学入試に向けて
永井室長にお話をうかがいました >

* * *

来年度の入試では、定員、試験科目、試験日に変更はありませんが、以下の点を変更しています。

- ・集合時刻を8:15から8:30に遅らせる
- ・各教科間の休み時間を10分長く取る
- ・お弁当持参で昼休みを取る

受験日当日はかなり遠方から来られる生徒さんが増えてきたため、朝は少しでも余裕を持たせてあげたいと思います。また小学生なのでテスト中も余裕のある時間を組んで十分力を出していただける環境を作りたいと思っています。

浪人ができる大学入試と違い、中学受験は多くの生徒にとって一度きりです。ボーダーライン上では1点の中に40人くらい集まる場合もあります。私たちは一つの解答を必ず複数の目でていねいに採点していますし、判定会議は真夜中になる場合もありますが、できる限り子どもたちの視点に立って入試をやろうという思いで、このような時程にしましたのでご理解いただけると助かります。

最後に受験生の皆さんにアドバイスするとすれば、とにかくあきらめないでくださいということですね。過去問題集などにある解答はあくまで模範的な解答で、われわれが求めている解答とは異なることもあります。自信がなくて何も書かないというのは違います。お気づきかもしれませんが、学校が公表している平均点は意外と高いと思われるはずです。これは問題に対して単に○×で採点するのではなく、細かく部分点をつけているからです。ですので、途中であきらめることなく、解答してほしいと思います。

外国に一番近い英会話教室 子供が自主的に英語の勉強が できるようになる秘密とは？

1クラスに2名のネイティブクラスの先生が8～10名のクラスに入り授業を担当。アメリカでも高い評価を得ているPBL(Project Based Learning)というメソッドによる指導など、グノキッズではそれまでの英会話教室になかったシステムを用いてレッスンを展開しています。

今回は、子供たちが自分から進んで勉強ができるようになる秘密をうかがってきました。



(左から)ジェイミー、リサ、リアン、サム



(左から)シェイマス、カズミ、アレックス

臨場感のある教室づくり

サム：教室のデザインを担当しているサムです。教室づくりにはとても気を使っています。一步教室に入ったら、そこは、まるで海外の学校で学んでいるような雰囲気味わってもらえるように工夫をしています。教室内に掲示しているポスターのほとんどのものが、外国人の先生たちの手作りです。授業中に使用する玩具も海外から取り寄せています。グノキッズでの授業が、初めての習い事になるお子さまも

おりますので、家とは違うけれどリラックスできる！と感じてもらえることを一番大切に、私たちも含め、教室ごとすべて、グノキッズのことを好きになってもらえるように工夫しています。

指導法の特長

ジェイミー：カリキュラム作成を担当しているジェイミーです。多くの英会話教室では、年少～年長コースは1レッスン平均45分で行われていて、毎回

の授業内容で何を教えるかがきちんと決まっています。私も以前、そのような英会話教室で教えていました。講師が1名に対して生徒たちが8名〜12名と多い為、子供たちの理解度を確認できないまま時間が過ぎてしまうことが実際に多かったのです。仕方ないことですが、講師1名対多数では、どうしても講師が生徒たちにリピートをさせる指導が主になってしまいます。

すると、先生の言ったことを真似するのは上手になりますが、会話力、

◎ **PBLのご紹介** (P38 本文をご参照ください)

 1・2年生コース 4～5月のプロジェクトは
「**ハワイ旅行** (Trip to Hawaii!）」でした!!

1・2年生コース

4月～5月のプロジェクト

このプロジェクトのテーマはハワイ旅行！ 旅にちなんだ様々な場面に合わせて練習をし、実用や遊戯形を使っていきます。みんなで楽しい旅に出かけよう！

Project 2: Trip to Hawaii

	ボキャブラー	英語のフレーズ	内容
レッスン 1	passport, backpack, suitcase, ticket, sunscreen, toothpaste, swimsuit	所有物を確かめる: "Is this your backpack ?" - "Yes, it is." - "No, it isn't!"	自分のパスポートを作ります。このプロジェクトを通していろいろな場面を使っていきましょう！
レッスン 2	blanket, fork, drink, napkin, snack, pillow, spoon	もう1つものを追加をお願いする: "Can I have another fork , please?" - "Sure. Here you go!"	空港に行ってみましょう！ 飛行機に乗って旅をすることを想定して、空港や飛行機でのやりとりを英語で練習します。
レッスン 3	go shopping, go hiking, go hula dancing, go fishing, go snorkeling, go swimming, go surfing	予定について話す: "What are you going to do today?" - "I'm going to go hiking ."	ハワイをテーマにしたアクティビティを行います。どんな楽しいゲームがあるかな？
レッスン 4	first, next, then, later, eat Hawaiian food, swim with dolphins, see a volcano	予定を順に話す: "First, I'm going to swim with dolphins ." - "Next, I'm going to see a volcano ."	旅の予定表を作りましょう！ さらにたくさんハワイをテーマにしたアクティビティを楽しみます。
レッスン 5	an amusement park, a zoo, a museum, a national park, a luau, a beach, a canyon	旅について話す: "How was your trip?" - "Great! I went to a beach ."	ポストカードをデザインして送ります。
レッスン 6	eat → ate, see → saw, go → went, ate pancakes, ate fish, saw a volcano, saw a whale, went hiking, went snorkeling	過去に行ったことについて話す: "What did you do?" - "I saw a whale ."	写真アルバムを作ります。プロジェクト中に撮影した写真を実際に貼って、どんなことをしたのかを書いて、思い出のアルバムにしましょう！
レッスン 7	復習	復習	アルバム作りを引き続き行います。どんなことをしたのかを言う練習をしましょう。
レッスン 8	復習	復習	発表会

このプロジェクト
で読む2冊の本

- Volcanoes! (National Geographic Readers) by Anne Schreiber
- Dolphins (National Geographic Readers) by Melissa Stewart

この
プロジェクト
の歌

- The Other Day I Met a Bear
- There Was a Great Big Moose



＜レッスン5＞
ポストカードを作成して送りました



＜レッスン4＞
ハワイならではのアクティビティに挑戦！

★4・5月には、小学3～5年コースは同じ「Trip to Hawaii!」、未就園児コースは「Shopping Trip」、年少～年長コースでは「Let's make a zoo!」と、どれもわくわくするようなテーマでプロジェクトを行いました。

対話力を育むことは難しくなっています。「How are you?」と聞かれたら「How are you?」とリピートするのではなく、その日の気分で「I'm great!」「I'm OK」と答えられるようになることが自然な会話ですよね。

私たちは子供たちが自分の考えや、要望を口にして言えること、英語を使ったコミュニケーションができることに最大限注力をしています。私たちがどのようにしてお子さまのコミュニケーション能力を伸ばしているのか、詳しくはこの後の「1クラスに2名の講師」のパートで責任者のリサ先生からお話しいたします。

ジェイミー：グノキッズのレッスンは90分で行っています。私たちがお子さまと共に歩んでいくためには、最低限必要な時間だと考えています。Warm upでは、たとえば「How are you today?」から始まり「Do you like...?」「What did you do yesterday?」など日常会話の質問を使ったコミュニケーションを毎回行っています。子供たちはすぐに反応できるようになります。満面の笑みを浮かべたり、時には得意そうに答えたり、子供の表情はとても生き生きしていて、私たちも心が温かくなります。

その日に学ぶ単語も大事なのですが、私たちの大きな柱として、「日常会話が当たり前のように受け答えできるようになること」もコミュニケーションという意味では必要なことです。

それでも英語を身につけるには、週に1回、90分の授業だけでは足りません。ある程度のより日常的な訓練が必要になります。そこで、グノキッズでは家庭学習用ビデオを作成して自宅でも英語に触れることができるようにしています。

ホームページでもサンプルビデオを用意していますので、ご入室前の方にはぜひ観ていただきたいです。ビデオもそうですが、カリキュラムや教材もすべて自分たちで制作しています。子供たちのレッスンでの反応、子供と保護者の皆さまの声がすべてこれらに役立てられています。

PBLについて

シェイマス：ビデオ作成を担当しているシェイマスです。グノキッズのレッスンで取り入れているPBL指導法とは、自分たちでいろいろな活動や経験を「プロジェクトに取り組みながら学ぶ」というものです。1つのプロジェクトを8週間かけて、工作などの手作業も交えて学んでいきます。その中で関連性のある語句やフレーズを反復練習しながら学んでいくのです。

たとえば4～5月の小学1・2年生コースプロジェクトでは「Trip to Hawaii!」というテーマで学習しました。校舎内を空港にし、先生たちが空港スタッフに扮して、子供たちは旅行前の準備から、旅行中のこと、帰国してからのアルバム作りを疑似体験していくのです。

1週目では自分のパスポートを作り、飛行機のチケットやスーツケース、荷物を用意することを体験しました。ここでは、passport, suitcaseなどの単語や「Is this your backpack?」「Yes, it is.」「No, it isn't.」などのフレーズも学んでいきます。

飛行機に乗ったシーンでは「Can I have another fork, please?」、帰ってきて写真アルバムを作るシーンでは「I saw a whale.」などの表現を学習しました。

90分の授業はPBLのテーマに沿って音読やゲーム、またオリジナル教材を使ってのPhonics(英語の正しい発音・読み方を教えるために英語圏でも広く用いられている指導法)などを行っています。

8週目の最終回では発表会を行っていて、保護者の方には作成物をご覧いただき、音読や歌などを聞いて一緒に楽しむ時間をとっています。8週かけて学んできた内容の成果を保護者の方々が肌で感じ取れる機会になっていて大変好評です。

1クラスに2名の講師

リサ：責任者のリサです。私たちの

授業は、1クラスに先生が2名入る点が大きな特色です。先生2名による英語のやり取りを聞くことで、生きた英会話を常に経験することができます。またグノキッズの先生は「子供の英語教育を実践したい」という志が集まった者同士、信頼関係も厚いです。お互いにカバーし合い、レッスン中の子供の変化を見落とさないよう心掛けています。

子供たちはレッスン中の会話を本当によく聞いています。「○○君をフォローして」「○○持ってきて」など先生同士で、もちろん英語で話すのですが、「大丈夫!」「OK!」など、子供の方が反応するのです。ご家庭でもご両親やご家族の話を聞きながら言葉を覚えていきますよね。同じ環境が教室にあれば、英語であっても少しずつ理解していき、話せるようになるわけです。

2名の先生の関係は、クラスの担任と副担任のようなものです。副担任の先生は変わることもあります。特定の先生とだけでなく、誰とでも話せるようになってもらいたいからです。

受講生の中には英検を取得していたり、海外滞在経験がある子供もいます。グノキッズでは年齢に合ったクラスで受講していただいています。先生が2名いることで、同じレッスンのなかでも個別に課題を与えることができますから、クラスの中で自然とレベル分けができていることも特長です。

また、上手に発音ができる子にはお手本になってもらい、子供たちがお互いを意識し、切磋琢磨して英語を身につけていくよう指導しています。

来年度の小学生クラスについては、長く通われている子供と新しく学ばれる子供との間には大きな差がありますので、レベルを分けて受講できるようになります。グノキッズに通わせている保護者の方々は、お子さまの上達を日常生活の中で十分に感じ取っていただいていると思います。お迎え

に来たお母さまと、レッスン終了後に授業中の様子や家庭学習の話をしますが、私たちが英語で話していると、横で聞いていたお子さまが英語で返事をしたりと、そんな自然な場面から成長を感じていただけているのではないのでしょうか。子供たちのレッスンの反応を見て、教材づくりにも役立てています。最近ではお母さまからビデオの感想をいただいたり、ご要望をいただいたりすることもあります。すべてありがたく受け止めて参考にしています。

メッセージ

アレックス：ご家庭では、保護者の皆さまはお子さまの将来を考えて、いろいろな環境を整えていることと思います。私たちは「子供英語の指導者として」その一部を担いたいと考えています。英語で自分の考えを伝えることができるように、一緒に楽しみながら勉強しましょう。

リアン：私たちが子供たちに関われるのは、ほんとうに短い期間かもしれませんが、お子さまの将来にとって「英語」

は長きにわたり役立つでしょう。そのきっかけの英語を私たちにお任せいただきたいと思います。必ず好きにさせてみせます。

カズミ：私たちは授業ではとにかく声にだしてもらうことを重視して、伸び伸びと学べるレッスンを心掛けています。そんな楽しいレッスンを子供たちに味わっていただきたいと思います。

リサ：ぜひ体験レッスンを受けていただきたいです。ホームページにも、いろいろな情報を載せていますので、ご覧ください。教室でお待ちしています。



グノキッズをネットでチェック!

グノキッズ 検索
<http://www.gno-kids.com>



School Blog



Facebook



YouTube







ブログ、Facebook、YouTube を通じてグノキッズのこと、先生のこと、そして英語の楽しさを発信しています。ぜひ、ホームページからご覧ください!!

グノーブルの先生は「近い」

私たちはすぐに皆さん全員の名前を覚えます。

授業中には、黒板や教材ではなく、皆さんと向き合っています。

教材の用意も、授業の準備も、皆さんの顔を念頭に置きながら。

個別添削も毎回行い、一人ひとりの成長を応援していきます。

皆さんと互いに敬意を持てる関係、明るく活気ある環境を堅持します。

グノーブルで、頭をフルに使う楽しさを実感してください！



2015年 大学受験合格実績 9期生〈在籍603名〉

東大各科類 121名

理科Ⅰ類	38名
理科Ⅱ類	18名
理科Ⅲ類	5名
文科Ⅰ類	22名
文科Ⅱ類	26名
文科Ⅲ類	12名

東京大学
121名

国公立慶医
47名

医学部医学科 160名

東京医科歯科大(医)	2名
東北大(医)	2名
千葉大(医)	3名
筑波大(医)	2名
横浜市立大	4名 他
※国公立大医	計42名
慶應大(医)	5名
東京慈恵医大(医)	14名
順天堂大(医)	21名
日本医大(医)	18名
昭和医大	15名 他
※私立大医	計118名

京都・一橋・東工 52名

京都大	9名
一橋大	25名
東工大	18名
東外大	13名 他
※国公立大	計279名

慶應大
273名

早稲田大
288名

上智大
126名



2015年 中学受験合格実績 2期生〈在籍97名〉

最難関中
63名合格

筑波大附属駒場中 4名/開成中 5名/麻布中 4名
駒場東邦中 3名/武蔵中 1名/栄光学園中 5名/早稲田中 4名/灘中 1名
桜蔭中 6名/女子学院中 5名/豊島岡女子中 4名/フェリス女学院中 2名
聖光学院中 5名/慶應義塾(普1・中4・湘2) 7名/渋谷幕張中 7名 その他難関中にも多数合格！



大学受験 **グノーブル**

個別指導 **グノリンク**

中学受験 **グノーブル**

英会話 **グノキッズ**

グノーブル総合案内

www.gnoble.com